

---

# **流星のロックマン4-絆-**

亜種

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロックマン4 - 絆 -

### 【ZPDF】

Z1565P

### 【作者名】

亞種

### 【あらすじ】

地球を3度も救ったスバル。あれから約2ヶ月後…6年生になったスバルにまた戦いが始まる。

## プロローグ

### プロローグ

- 謎の場所 -

「おい、アレは進んでいるか。」

「ハイ順調です。」

「そうか…後少しだ…アレが完成すると、地球は私の物に…クックツクツ」

スバルは知らなかつた…

この後どんな事になるなんて…

この後スバルはいろいろな事があるだろう…

恋…出逢い…戦い…そして、別れ…

スバルの運命は誰にも変えれない…

はたしてスバルに未来はあるのか…

(主なキャラクター)

・星河スバル(ロックマン)　・ウォーロック　・星河茜　・星河  
大吾　・響ミソラ(ハープ・ノート)　・ハープ　・白金ルナ朝

『早く起きろスバル!』

「うーん。おはよう、ウォーロック」

そして、着替えにいつた。「〔やけにすんなり起きるな…〕」

そう思うウォーロックだった。

そして、スバルについて行くように階段を降りた。

スバルがイスに座ると、ウォーロックが聞いた。

『一体どうしやがったんだスバル? やけに嬉しそうだな』  
「今日は転校生が来るらしいよ! しかも3人だよ!』

スバルは嬉しそうに言った。そして、

「行つて来ます！」

と言つて扉を開けた。すると、

「　「　「おはよつ（いざります）、スバル（吾）」」」 「おはようみ  
んな」

ルナ、キザマロ、ゴン太が挨拶した。

「そ、早く学校へ行つて転校生を迎える準備をするわよ！」

そう言つてスバル達は学校へ行つた。

・ウホーブロード・

そこにはギターを背負つた女の子の電波体がいた。

「久しぶりだねスバル君！また会えてうれしいよ！しかし驚くだろ  
うなースバル君」

スバルを見ながら言つた。さらにも、その子は学校へ行つた。

つづく

## 衝撃の転校生

-学校-

「転校生誰だらうね。」

「可愛い女の子がいいな。」

クラスは転校生の話でもちきりだ。

「おーいみんな席に着け。」

先生が言つと、みんな待つてましたと言つよつにすぐには席に着いた。

「よし、一人ずつ入つてこい。」

すると、見覚えのある人が入つて來た。スバルは思い出し、

「ツカサ君！！」

そう、その少年は前に同じクラスだったツカサだった。

「よし、自己紹介は後にして次入つて來い」

すると、また見覚えのある少年が入って来た。スバルは思い出し、

「ジャック！！」

そう、二人目はついこの間までいたジャックだった。

「よし、最後だ。入つて来い。」

すると、クラス中衝撃だった。

「　「ミソラちゃん」」

クラス中ハモつた。さらに、パニックになつた。すると先生が

「みんな落ち着け。じゃあ軽く自己紹介しろ。」

そつとツカサから始めた。

「はじめましてと久しぶり！前に同じクラスだった人も初めての人もヨロシク。」

「はじめまして…ジャックだ…ヨロシク。」

「はじめましてかな？とにかくヨロシク。」

3人とも自己紹介が終わると、先生が席はどこがいいか聞いた。

ツカサとジャックはどこでもいいと言つた。

しかしミソラだけは違つた。

「私スバル君の隣がいいです！」

すると、クラスの男子+ルナが殺氣を出しながら視線を向けた。

「（なにこの殺氣は…）」  
とスバルは少しビビっていた。

すると、ミソラがスバルの隣の席へ行き座った。

「久しぶりだねスバル君 ヨロシク」

笑顔で言われて少し元気が出たスバルだった。

この後始業式が終わつた後にスバルが質問責めだつたのは言うまでもない…

つづく

## 衝撃の転校生（後書き）

どうでしたか？

「なんかセリフ少くない？」

おやここれはスバル君。大丈夫です次回は多いから。

「頼むよ！」

ハイ！

感想待つてます！

## 波乱の昼休み

昼休み・屋上・

「でも転校生がツカサ君とジャックとミソラちゃんなんだつたなんてビックリだよ！連絡くらいくれても良かつたのに。」

『そうだぞ！それにハープはうるさいし『誰がうるさいって……』  
『げつ！ハープ！』

ウォーロックはとても驚いていた。

『ハイ、アンタはこっち！』

そう言ってウォーロックは何処かへ連れ去られた。

『助けてくれ／＼＼＼＼スバル＼＼＼＼』

しかしスバルは助けなかつた。

しばらく沈黙が続いた…

沈黙を破ったのはミソラだった。

「あ……あのね……」

「？」

するとミンカラの顔が少し赤くなつた。

「わ……私……スバル君の事が……」

ドカーン

「何っ！」「何があつたのハープ！」

いつの間にかハープもウォーロックも戻つていた。

『公園で電波体が暴れてやがる！しかも1体じゃねえ！！100体はいるぞ！！！』

「「そんなにいるの！」」

するとハープが、

『しかも普通のウイルスより少し手強いわよーー！』

そしてハンターVGが鳴つた。

《サテラポリス及び遊撃隊につぐ。コダマタウンの公園にてウイルス発生！直ちに現場に迎え！》

「いくよウオーロック！電波変換だ！」

『久しぶりに腕がなるばー』

ウォーロックはとても喜んでいた。

『私達も電波変換よー!』

「いいよハープ!」

「電波変換ーー!」

「トランスコード シューティングスター・ロックマンーー!」

「トランスコード ハープ・ノートーー!」

そしてロックマンとハープ・ノートになつた。

「いくよー!ハープ・ノート!」

「うん。ロックマン!」

この時ハープ・ノートは何故か嬉しそうだつた。

(（久しぶりにロックマン見たな～やつぱかつこいこいーー）

そつ思ひハープ・ノートであつた。

-公園-

公園に着いた二人。辺り一面メットンだつた。

「ねえロックマン、いつもと少し違うと思うけど…」

確かにヘルメットの色が黄色ではなく、紫だった。

「ただけど今はウイルスを倒そう!」

数分後ウイルスは全てデリートされた。二人は電波変換を解きいた。

「やつたね、スバル君」

「そうだね!じゃあ戻ろう!」

そして二人は学校へ戻った。

つづく

## 波乱の昼休み（後書き）

どうでしたか？バトルの部分は今回は省略しました。次回からは必ず書きます。感想待っています！

えええええええ！－！－！

-下校中-

「へ～そうだつたんだ。呼んだら良かつたのに。」

ツカサが少し残念そうに言った。

「じゃあサミカテ！」ツカサは帰った。

「そりゃ、いえ上はソリハヤん家何處なの？」

そよ 細柳遠しんじやなし「」

「大丈夫だよ！ だつてここだもん」

そう言つて指したのはスバルの家だつた。

「」「」「」「」「」「」

周辺に驚きの声が響き渡った。

「「どうこう事だ（ですか）スバル（君）！…」

「知らないよ！僕だつて今知つたばかりなんだから！」

「お母さんから聞いて無かつたの？」

「聞いて無かつたよ！…」

すると後ろの方から一人をしのぐ怒りと殺氣があった。

スバルは恐る恐る後ろを向いた。

「スバル君！…！」

「ヒイ〜〜〜」

するとスバルはミソラの腕を掴んだ。

「えつ」

ミソラの顔が少し赤くなつた。

「逃げぬよー。」「いやせん。」

「うん…」

そして二人は家帰つた。

「待ちなさい～～～！」

その後、ルナはずつと機嫌が悪かつたらしい……

卷之二

ええええええーーー（後書き）

次回は恋愛です。

感想待つてます！

## 家族

-スバルの家 -

バタン!!

そこには息を切らしたスバルとミソラがいた。

「ハアハアハア、なんとか逃げれた。」

「ハアハアハア、ス…スバル君…そろそろ腕離して…」

ミソラが少し赤くなり言った。そしてスバルも少し赤くなり、

「う…ごめん…」

そしてスバルは腕を離した。

すると茜がやつて来て、

「お帰りなさいスバル、ミソラ。あらあら、一人とも赤くなつて。

なにかしたの一人とも。」

そう言うとスバルとミンラはさらに真っ赤になつて、

「「な…何もしないよ（ません）…」」

と、二人は見事にハモつた。

「あつ！」

ハモつたので、二人は顔合せた。

すると茜が、

「そんな事よりちゃんと挨拶しなさい。」

何事も無かつたように言つた。

「わかったよ！ただいま、母さん。」

「お邪魔します、スバル君のお母さん。」

すると茜が、

「ハーハー、お邪魔します」じゃなくて「ただごめん」だよ。

L

「えつ！」

「やつだよーーー!!」つりちゃんの家で、家族なんだからー！」

そう言つと、ミソラが突然、

לען רען רען

と泣き出した。するとスバルは慌てて、

「アーティストの...」

「だって、家族って言つてくれたのが嬉しくて。」

セーフティーガード

「せっか、ミソラちゃんは家族を亡したんだったわね。じゃあミソラちゃん。これから私の事を「お母さん」と言ひなでこ。私も「

そういうところは泣きやみ少し照れながら、

「はい、お、お母さん。」

「はいミソラ。ミソラはスバルとスバルの部屋へ行つて。夕飯の用意するから。」

「「はい」」

そして二人はスバルの部屋へ向かつた。

つづく

**家族（後書き）**

やつと夕方だ…

前回に、「次回は恋愛」と言つてましたがそれは次回です。すいません！ 感想待つてます！

## 告白

-スバルの部屋 -

「へー、これがスバル君の部屋かー。やっぱり宇宙の本が多いね！」

「あんまり散らかさないでね。」

『もう遅いぜスバル。』

ウォーロックがそう言ったので、スバルが振り向くと、ミソラが散らかしていた。

「ミソラちゃん！」

少し怒った声で言ひと、

「『めんね（涙目）』

当然涙目は演技だった。

「（ハハ）わかったよ。やつこねば屋上でなにか言いかけたね、僕の事がどうたらって。」

「あんといフリは少し赤くなつて言つた。

「スバル君はシーサアイランドの時の夜の事覚えてる？」

するとスバルも少し赤くなり、

「うんー覚えているよ。//ソラちゃんと手を繋いだね。」

そつまつとソラは少し照れながら聞いた。

「その時嬉しかった？」

「う、うんー嬉しかったよー。」

「良かったー！」

「？」

するとミンカラは真っ赤になつて、

「わ、私スバル君の事が好きです！付きあって下さい！」

「えつ！」

スバルも真っ赤になつた。そしてじばらくすると、

「ほ、僕もミソラちゃんの事が好きでした！付きあって下さい！」

すると二人とも笑顔になり、

「喜んで！…」「

するとミソラがスバルに抱きついた。

「やつた～！嬉しい！」

当然スバルは真っ赤になつた。

「なつ、何するのミソラちゃん！」

「いいじゃん！カップルなんだから」「

「いつまでもミンラはもう」強く抱きしめた。

「じゃあキスしてスバル君」

「なんで！」

「駄目……（涙目 + 上目遣い）」

「（うつ）でもねー」

ミンラの演技に弱いスバルだった。

「おねが……んつ」

その時ミンラの唇にスバルの唇が重なった。

スバルは少し照れながら、

「今日だけだよー！」

するとミンラは笑顔になつて、

「スバル君大好きー」

と言つてまたスバルに抱きついた。すると、下から

「スバル～ミソラ～ご飯よ～」

と聞こえたので、

「ほら、離して。」

と言われたので、ミソラは頬を膨らまし、仕方なく離した。

少し残念そうだったので、スバルは

「また夕飯が終わつたらしていいから。」

と言つと、ミソラは笑顔になつて、

「うんー。」

とうなづくと、二人は階段を降りた。

つづく

咲田（後書き）

やつと並んでいた。最近アイデアがどんどん出でてゐる。感想待つてま  
う！

えええええええ！！！！

-リビング-

「ミソラ～用意手伝つて。」

「はい」

「そう言つてミソラは手伝いに行つた。すると、ハンター→Gからウ  
オーロックが話した。

『なんかミソラとオフクロも仲いいな…』

「あっ、ロック。どこに行つてたの？」

不思議そうに尋ねると、

『ハープの野郎に拉致された。』

『仕方ないじゃない！アンタがいたらムードぶち壊しじゃない！』

『なんだと！！』

そう言つてウォーロックとハープが口論になつた。

「二人ともやめなさい！」

用意が終わつたミソラが言つた。

すると二人はしぶしぶハンターVGに戻った。

「 わたしも食べよう。」

と聞か言ひた。

「「「いただれもかー。」」」

しばらくすると、大吾が帰つて来た。

「ただいま～早く飯食べよ」

そして、大吾も食べ始めた。

「やつにえがきちゃんはどうしてここにいるの？」

スバルが聞いた。するとミソラは、

「スバル君の部屋だよ！」

スバルは驚いてお茶を吹いた。

「さやーー、スバル君汚い！」

「だつ、だつて普通ビックリするでしょ。」

「なんで~」

「別にいいじゃないスバル。」

「母さんまでー。」

スバルがやめてとおうと思つたがやめた。なぜなら大吾が加勢したからだ。

「さすがにそれはまずいだろ茜。」

「ふふふ、あのね……」茜が、大吾に耳打ちした。

「ふうんそうゆう事か。いいぞ、スバルの部屋で寝て。」

「父さんまで~~」

「そつと決まればミンラの荷物はスバルの部屋に置いておくわよ。」

「ハイ、ありがとうござります。」

この後スバルはテンションが下がつたまま夕飯を食べた。

うふへ

次回のテーマは喧嘩と仲直りです。感想待つてます！

## 喧嘩する母と仲がいい

夕飯を食べ終わり、片付けをしていた。

玄関ではスバルがどこへ行く準備をしていた。

「じゃあ展望台へ行つてくるよ母さん。」

するとスバルはミソラの視線に気がつき、

「ミソラちゃんも行く？」

「うん！ 行く！」

と言つてスバルについていった。

扉を開けると、ツカサがいた。

「あつ、ツカサ君。何してるの？」

「あつ、スバル君。僕は散歩だよ。スバル君は何処かへ行くの？」

スバルは展望台へ行くと言おうとしたが、

「トートだよ」

と、ミソラがスバルの腕に抱きついた。

「そう、邪魔しちゃ悪いね。また明日。」

「あっ、ちょっと。」

もづきカサはいなかつた。

「もう、なんて事<sup>いつ</sup>んだよ!!」つかやん!」

「いいじゃない スバル君は私の事嫌い?」（涙目 + 上田遣い）

「（うう）あっ、好きだよ。ミソラちゃんの事」

「じゃあいこでしょ」

そう言つて二人は展望台へ行つた。

「スバル君！ねえスバル君てば！」

ミソラが呼んでいるが、スバルは星を眺めていた。

「もういい！帰る！」

そう言って帰ろうとした。すると、

「あれ、ミソラちゃん帰るの？」

スバルは今頃話した。

「ス…」

「ス？」

「スバル君のバカ！スバル君はずつと星を見ていいればいいんだ！」  
そう言つてミソラは帰らうとした。

「待つてよー！」

スバルはミソラの肩を掴んだ。

「離してよー！」

ミソラが振り払おうとするが、スバルはミソラを抱きしめた。今までより強く。

「えっ！」

「「」めでたミソラちゃん。僕星を見てるとつっこぼーっとしてしまつた

だ。でも//ソラの機嫌を直すのに必死だった。

スバルは//ソラの機嫌を直すのに必死だった。

「（スバル君…）いいよ。」

「良かつた」

「でもただじや許さないよー。」

「（嫌な予感）なつ、何？」

「キスして…」

「えーー」

「しないと許さないよー。」

「えーー」

「いーーんつ」

スバルは//ソラにキスをした。今回は数分間…

そしてやめた。

「今日は特別だよー今日だけなんだから。」

「（スバル君…）ありがと。」

「わあ帰らうか。」

「うん」

そして二人は帰つた。

手を繋いで

つづく

## 謎のメール

-スバルの家 -

「「ただいま」」

「お帰りなさい」「一人とも。あら、一人とも顔が赤いわよ。」

茜がそう言つと、二人は逃げるように部屋へ向かつた。

-スバルの部屋 -

『お帰りミソラ。あら何かあつたの？一人とも。』

「「なつ、何もないよ（わよ）。」」

すると、スバルは

「そういうえばロックはどうにいたの？」

ウォーロックは苦しそうに、

『ハープに拉致された。』

そう言うとスバルはため息をついた。すると、

『そういう前らは何してたんだよーなんかおかしいぞ』

すると一人は動搖した。しかしミソラは諦めたのか、全て話した。

『へー、スバルもやるじゃねえか。』

『すごいわね。スバル君。』

その時二人は真っ赤になっていた。

『ホント、ガサツな誰かさんとは大違いね。』

『んだとおーー』

『喧嘩は外でやってねロック。』

『ハープもよ』

すると二人（2体？）は外へ行つた。

「さて、風呂に入らうつと。」

「待つてよ～もう少し話そうよ～

スバルは風呂へ行こうとするが、ミソラが抱きつき、止められた。

「なんでー！」

「もう少し一緒にいたいのー！」

「えつ…わかたいいよ。」

と断れないスバルだった。

「ねえ、そろそろ離してよ。」

「いいじゃん！」

「まあいいけど、ミソラちゃんだから」

「嬉しい〜 大好き」

と、抵抗しなくなってきたスバルだった。

（

メールが届いた。スバルはメールを見た。

-スバル君、いえロックマン。いますぐ展望台へ一人で来て。ウオーロックはいいよ。 ハヂス -

「（ハヂス？誰だろう？とにかく行ってみよう。）」

「どうしたのスバル君？」

「なんでもないよ。ちょっと下に行くな。」

と言つて下へ降りた。

そしてスバルは展望台へ行つた。

「ロックいる？」

『ああ、いるぜ。展望台へ行くんだる。いいのかミソラに黙つて行

つて。』

「仕方ないだろ。一人で来いつて書いてあつたんだから。それにミソラちゃんを危険にしたくない。」

そう言つてスバルは展望台へ行つた。

- 展望台 -

「来たわね。スバル。」

少女は呟いた。

つづく

## 謎のメール（後書き）

次回この物語の鍵を握るキャラが出ます。感想待っています！

## 謎の少女

- 展望台 -

「ハアハアハア、ビニだ。」

展望台に到着したスバル。辺りを見渡すがどこにもいない。

『スバル！ ビジライザーをかけてフェンスを見ろ！』  
スバルはビジライザーをかけてフェンスを見た。するとそこには女の子の電波体がいた。

「誰だ？」

その電波体は体は白く、銀色の翼があり、顔は白いヘルメットのようなもので覆われてわからなかつた。しかし目の部分は透けて見えた。その目は冷酷な目だった。

「よく来たわね、スバル。早く電波変換しなさい。勝負よー！」

『挑むところだ！ スバル！ いくぞ！』

「うんー・ランスコード シューティングスター・ロックマンー！」

「行くぞハヂス！」

ロックマンはキャノンを撃つた。しかしハデスは読んでいたようにかわし、ロックマンの方を見た。

「いない！」

「後ろだ！」

「何！」

「ワイドソード！』

ロックマンはハデスを切った。

「ぐつー！」

『『樂勝！』

「甘いー！」

ハデスは隙をついてロックマンを蹴つた。

「うわー！」

しかしハデスはさらに攻撃した。

「キャノン+マヒプラス、マッドバルカン3、レーザーミサイル！」

「うわーーー！」

その後もハヂスは攻撃を続けた。

「一方ミソラ

「スバル君なんか怪しいなー。」

するとハープが

『ミソラー！今展望台でスバル君が闘っているわよ！しかも今やられてピンチよ！』

「えっ！」

ミソラは驚き、不安になつた。

「ハープ！私達も行くよ！」

『ええ！』

「トランスクード

ハープ・ノート！』

ミンラはハープ・ノートに変身すると、展望台へ向かつた。

・展望台・

その頃ロックマンはピンチだった。すると、

「結構強いね。なんとかいけるかな？」

「なんの事だ！」

すると、

「ロックマン！」

「ハープ・ノート！」

ミンラはロックマンに駆け寄った。

「大丈夫？それよりあいつは誰？」

するとハデスが

「スバル覚えてないの？」そしてハデスは電波変換を解いた。そこには銀色の長髪で青いワンピースを着た可愛らしい少女がいた。

「あつ、君は！」

スバルは驚いた！

「久しぶり！スバル！」

「ラ、ライト！」

スバルはそう呼んだ。

つづく

## 謎の少女（後書き）

どうでした？次回はライトの事が少し明らかになります。感想待つ  
てます！

## 正体・嫉妬・一縁

「ライト…」

スバルが呼んだ。

「やつと思い出してくれた、スバル。」

「なんでライトが電波変換出来るの。」

「まあ、色々あつたの。今は言えないけど。」

「ふーんやうなんだ。でも本当に久しぶりだね…5年ぶりかな?」

「それくらいたつたんだ。それにしてもスバルはかつ…よくなつた  
ね。」

久しぶりの再会に喜んでいると、スバルは後ろに殺氣を感じた。

恐る恐る振り向くと、黒いオーラを出したミソラがいた。

「スバル君!」

「(怖い。)「めでたしかやん!」

「今回は許さないよ!」

「えーー

そんな二人を見ていると、ライトはいつ思った。

「（へー、一人はそうゆう仲なんだ。やるねスバル。）」

と二人の関係を知ったライトだった。

「じゃあ帰るね。なんだか邪魔みたいだし。さよならスバル。」

と言つて何処かへ消えたライトだった。

「さよならライト。」

「さあ僕達も帰ろう。続きは僕の部屋でしよう。」

そつ言つて一人は帰つた。

-スバルの部屋 -

「『いぬき』ミソラちゃん！」

土下座をして謝っているスバル。するとミソラが口を開いた。

「スバル君！」

「ハイ！」

「心配したじゃない。」

「えっ？」

ミソラが言つた事が以外で少し驚いたスバル。

「私…スバル君が居なくなつたらつて思つたのよ！また大切な人が居なくなつたらつて…」

「ミソラちゃん…」

ミソラは泣き崩れた。

「それになんでライトって子に呼び捨てで呼んで私はちゃんとづけなの…私…また孤独になるのは嫌だよ！」

するとスバルはミソラを優しく抱いた。

「『いぬき』ミソラちゃん…僕はミソラちゃんを危険にしたく無かつ

たんだよ……それにね、ライトとは友達だよ。呼び捨てにする理由はあるんだよ。だから、「めんね」ソリソリちゃんと…」

「うつまつとソソソは泣き止み、スバルを強く抱いた。

「ここのよ。」ソリソリめんね…。勝手にせきもせきじいてスバルにあたつて。」

「なんでソリソリめんが謝るの。僕が悪いの。」

「これからは何処かへ行く時は伝えてね。」

「うん！約束するよ。」

そして二人はさきに強く抱きしめた。

「そんなことより、なんで呼び捨てにするのかの訳を聞かせてよー。するとスバルは話し始めた。

「僕はコダマタウンに来る前に秋葉町に住んでいて、ライトとは幼なじみだったんだ。それにライトちゃんって呼んでいたんだ。」

「なんで？」

「そりゃ僕は誰にでも「君」や「ちゃん」をつけろよ。」

「へー。」

ミソラはスバル君は前から礼儀正しいんだなと思つた。

「そして引っ越しの時にライトが今度会う時は一人とも呼び捨てにしようつて約束したんだ。」

「ふーん、スバル君にそんな過去があつたんだ。」

安心したように囁つた。

「じゃあ私も呼び捨てで呼んでよ」「

「なんでー。」

「いいじゃない、彼女なんだからね」「

「学校以外ならね。」

「ヤッター じゃあ今呼んで」「

とミソラが言つと、スバルは照れながら、呼んだ。

「〃...ミソラ」（小顫）

「もーと大きな声で」「

「ミンラ」

「もう一回」

「ミンラ」

「ありがとう」

ミンラはスバルに抱きついた。よほど嬉しかったのか、ベットまで飛んだ。するとミンラが

「んっ……」

スバルにキスした。

「何するのー？」

「お・し・お・わ」

「ま、いつか。」

- 外 -

『 やるな！スバル！』

『 ホント、ガサツな誰かさんと大違いね』

『 んだと…』

二人はまた喧嘩し始めた。

-スバルの部屋 -

「 じゃ、寝よつか。」

その時、ミソラはベットに横になっていた。

「 じゃあ布団取つてくるね

スバルが布団を取りに行こうとするが、ミソラに止められた。

「 待つて。」

「何?」

「一緒に寝よ スバル君」

「えーーー.」

「いいじゃん 彼女なんだから 黙目…?」（涙目 + 上目遣い）

「（それは反則だよー） いいよ。」

「じゃ来て。」

そしてスバルはベットへ行つた。

-数分後 -

「なんで抱きつくな?」

ミソラはスバルに抱きついていた。

「つて寝てるしー早つー.」

そう言つとスバルも疲れていたのですぐ寝た……

「なんだスバル君もう寝たんだ。それにしてもスバル君の寝顔かっこいい！後可愛い！」

そう言つてミンラも寝た…さらに強く抱きついて…

つづく

**正体・嫉妬・一緒（後書き）**

やつと1日終わった！しかもタイトルめめめめめー感想待ってます！

## 動き始めた組織

・土曜日の朝 -

『起きてろー・スバル！』

「後10分～ムーザ」

「ねえロック君、いつもいつなの？」

少し驚いたよひん//ソノワは聞いた。

『やつだよーったく、なんとかなんねえのかー。』

イライラしてると、ミンラが何か思いつき手をポンーと打った。

「やうだー・でもねー」

ミンラが少しだめらつていると、ハープが助言した。

『早くしなやこよ!!ソーラー・ポートに行けなくなるわよー。』

「やうだね よし、するわー。」

何故か氣合いが入っているミソラ。

ミソラはスバルの耳でこう言つた。

「ス・バ・ル・君、お・き・て」

しかしスバルは起きない。

「仕方ない、最後の手段を使おう」

何故か嬉しそうなミソラ。

するとミソラはスバルの鼻をつまんでスバルの口をミソラの口で塞いだ。

当然苦しくなりスバルは目が覚めた。

「んっ、んんんんん！」

(訳) な、何するの！

ミソラはキスをやめた。するとウォーロックは、

『今度からスバルを起こすのはミソラに決定だな！』

「私もいいよ。」

「あの～僕の意見は？」

スバルの意見は無視され、決定した。

「スバル君早く朝食食べて。今日はデートなんだから」

数分後、二人は出発した。

-公園-

電話だ。すると暁だつた。

『よおスバル！お、ミソラもいるな！なんだデートか？』

すると二人は真っ赤になった。

『まあいい。それよりデート中悪いがすぐにWAXA本部に来てくれ。』

「わかりました。」

そう言つて電話を切つた。

「『』めんね、デートは終わつてからでいい？」

「いいよ」

そして二人はWAXAへ行つた。

指令室に入ると、暁がいた。

「久しぶりだな！スバル、ミソラ。にしてもあのミソラを彼女にす

- WAXA - ホン支部指令室 -

るなんてやるなあスバル！」

すると二人は顔が真っ赤になった。

「そんなことより何の用ですか暁さん！」

「ああすまん、まず一人とも最近変なウイルスと闘ったか？」

「ハイ、あります。」

そしてスバルは昨日の事を話した。

「やはりそうか…。」

「何かあつたんですか？」

「それは俺から話そう。」

すると指令室に大吾が入つて來た。

「実は最近デイーラーを上回る組織を確認したんだ。」

「デイーラーを上回る組織…」

「組織の名前は分からぬ…。だが最近そいつらが動き始めた。そ

「いづらは「ある物」を探してゐるらしい…」

「「ある物?」」

二人はハモつた。

すると大吾が答えた。

「オーパーツだ!」

「えつ!でも海底に大陸と沈んだはずじゃ…」

驚いた様子のスバル。

「オーパーツは何故か移動した。だから奴らより先に見つけてほしい。」

「わかりました。でも何処にあるんですか」

心配そうに聞くと、

「今はまだだが反応があり次第連絡する。」

「そうですか。じゃあ僕達は帰りますね。」

スバルが帰ろうとすると、

「待ってくれスバル。お前に紹介したい人がいる。ミソラもだ。」

一人は振り返った。

「遊撃隊の新しいメンバーだ。」

すると3人入つて来た。すると一人は驚いた。

「「ツカサ君、ジャック、それにライト（ちゃん）ーー！」

「仲良くしろよ！以上解散！」

そして解散した。

スバルは遊撃隊の新メンバーに駆けよつた。

「ツカサ君電波変換出来るの？」

「うん！」

するとツカサの横にウィザードが現れた。

「『ジハニーーー』」

『違うぜ、俺はヒカルだ。それにツカサはもう一重人格じゃねえぜ。』

『

「へー、じゃあジHIII・スパークになるんだ。」

「やうだよ。それよりテートはいいの?」

「あつー。」

スバルが思い出したよつこいつと、隣に黒いオーラを感じた。

「まさか忘れてたの!」

「「」「めん!今から行こー。」」に行きたい?」

するとミンラは許したのか、笑顔で答えた。

「やうだね…ヤシブタウンに行こ」

「いいよ 行こ」

そうして二人はヤシブタウンへ向かった。

「なんかラブラブだな、あの二人。」

笑いながら言う暁だった。

六七八

## 動き始めた組織（後書き）

次回は「テートです。感想待つてます！」

パート中の兀…

- ヤシブタウン -

「そ、買い物に行こー。」

そうして一人は103デパートに行つた。

103デパートに入った時、手を繋いでいたので、視線が痛かつたらしい…。

「ねえそろそろ休もうよ…」

「いいじゃん、後少し」

スバルが疲れるのも当然である。なぜなら3時間くらい引っ張られているからだ。

するとスバルはある事を思いついた。

「じゃあ欲しい物ひとつ買ってあげるから休もう。」

「えつ、いいの？ありがとう」

「

そう言つてミソラはスバルに抱きついた。

「やつ、止めてよ人前で…買つてあげないよー。」

するとミソラは止めた。

その後、スバルはとても高い服を買わされた。

「そろそろお腹すいたね。食べに行こー。」

「賛成」

そう言って二人はカフェに向かった。

そしてスバルはミソラの注文した量に驚いた。

「そんなに食べて大丈夫?」

「大丈夫だよ 普通だよ」

そして二人は食べ始めた。

「そういうえば屋上に星の館が出来たんだって。行こよー。」

「行くの…」

少しためらつたミソラ。しかしミソラはこの後のスバルの言葉で了解した。その言葉は、

「一緒に星を見たいんだもん。」

そして二人は屋上へ行つた。

・星の館 プラネタリウム・

「きれいだね。ミソラちゃん。」

するとミソラは少し怒りスバルの邪魔をした。

「何するのミソラちゃん！」

「昨日の約束忘れたの！」

「（あひ、忘れてた）止めて、ミソラ…」

「ありがとう、スバル」

「えつ！」

スバルは真っ赤になつた。

「なんかスバルだけ可哀想と思つて…。だからこれからは一人とも呼び捨てだよ」

そして二人はプラネタリウムの夜空を見た。

手を繋いで…

楽しそうにすると、突然プラネタリウムが変な音を出した。

「何があつたのロック！」

『わからねえ！とにかくプラネタリウムの電腦に行くぞ！』

『ミソラもよー！』

そして二人は電波変換して、プラネタリウムの電腦へ行つた。

・プラネタリウムの電腦

二人は電腦に入ると、奥にはなんとあの電波体がいた。

「『『』』ハープ・ノートー』』」

そこにはもう一人ハープ・ノートがいた。しかしそのハープは青かつた。

「私の姿でするなんて許さない！」

そう言つてハープ・ノートは攻撃しようとすると、青いハープ・ノートがとても早く音符攻撃をした。

「危ない！」

そう言つてハープ・ノートをかばいロックマンが音符攻撃を受けた。

「うわっ！」

「ロックマン！」

そしてロックマンは少しよろけた。

【かばつたのか。何故あんな奴をかばう！】

「うるさいー。それよりお前は誰だ！」

【いいだろ？… 我が名はハープ・ノート … 新生・WWWによつて

【生み出された…】

「新生・WWW?」

【もついいだるひ…では貴様らを殺す…】

すると、音符攻撃をしてきた。

「オーラ、ワイドソード、ミニグレネードー」

ロックマンの体がオーラに包まれた。ハープ・ノートの攻撃はかき消され、ロックマンの攻撃は全て的中した。

するとハープ・ノートは笑った。

【なかなかやるな…だがこれならどうだー】

するとハープ・ノートは黒い物を放出した。

するとハープ・ノートはその場に崩れた。

「どうしたの！ハープ・ノート…」

「なんか苦しい…多分ノイズだ…」

するとロックマンは手元を見ると、驚いた。

「ノイズ率1000%!!」

しかしロックマンは

「ファイナライズ! ブラック・エース!」

そしてロックマンはブラック・エースに変身した。

【なんだその姿は…】

「ブラック・エンド…」

すると黒い球体にハープ・ノートは吸い込まれた。するとロックマンの腕に赤いでかいソードが現れた。

「ギャラクシー!」

【うわあ――――】

そしてハープ・ノートはテリートされた。

そしてロックマンは変身を解いた。

一人はウェーブアウトした。

「『めんねスバル、私足引つ張つて…』

ミソラは泣いた。そのミソラをスバルは手を繋いだ…

「全然足引つ張つてないよミソラ…だから泣かないで…」

そして二人は星空を見ながらキスをした。

そして家に帰り、夕飯を食べ風呂に入り部屋へ行つた。

「今日は疲れたねスバル」

「そうだね、明日一緒にWAXAへ行こー！」

「じゃ寝よスバル」

「また一緒…」

「いいじょん 駄目…」（涙目 + 上目遣い）

するとスバルは諦め、

「いいよ」

といふ、一緒に寝た。

しかし今日はスバルからミンラを抱きしめた。

だから今度はミンラが真っ赤になった。のでなかなかミンラは疲れなかつたらしい…

つづく

テート中なのに…（後書き）

スバルキャラ崩壊してゐる…次回お楽しみに！感想待つてます！

## 波乱の朝

-朝-

今日は珍しくスバルが先に起きた。スバルは起き上がりついとしたが、ミソラが抱きついている為出来なかつた。

スバルはゆっくりとミソラの手をどかして着替えた。

着替え終わると、ミソラを見た。

「（ミソラ寝顔可愛い…）」「

そう思つて見惚れていたスバル…

「もつと近くで見よ…」

そしてスバルはまた布団に入りミソラを抱きしめた。ミソラの顔をスバルの胸に寄せるように抱きしめた。するとスバルは寝てしまつた。

-数分後-

今度はミソラが起きた。

目を開けると、スバルの胸が見えた。その瞬間ミソラは驚いた。

「（なんでスバル服着替えてるの…）」

するとスバルは目が覚めた。

「しまった寝てしまった。」

するとミソラの視線に気付いた。

すると二人は真っ赤になった。

そして一人は離した。

「「J...」めんミソラ...」

「いいよ。私ホントはとても嬉しいの、スバルに抱かれて...ねえ、  
もう一回して」

「いいよ」

そして二人は抱き合つた。

「そろそろ下へ行こー今日はWAXAに行くから。」

そして下へ行つた。

-リビング -

「ねえスバル、あなたミソラと付きあつてるの？」

突然茜に聞かれてスバルは喉をつまらせた。

「な……何言つてゐるの母さん！付きあつてないよー。」

「ミツラは？」

「友達だよお母さん！」

すると茜は少し笑い、どんどん一人を追い詰めた。

「じゃあなんでいつも一人で同じベットで抱き合つて寝てるの？」

しかし二人は黙つたので、茜はさらに追い詰めた。

「ミツラはなんでスバルと付き合おうとしたの？」

「優しいし、かっこいい。後いつも助けてくれるから……あつー。」

「やつぱりねー！」

茜の策にはまつた二人。

この後一人は茜の尋問を逃げるよつて出発した。

う  
ん  
く

## 新たなサーバー

- WAXA -

「おおー・どうしたサクサクスバル！ サクサク」  
曉がうまい棒を食べながら言つた。

「実は……」

スバルはこの前の事を話した。

「そうか、新生・WWWか…… わかつた調べてみよう。しばらく  
待つてくれ。ヨイリー博士に会つてこい。」

そうして一人は指令室のメインコンピュータに向かった。

- メインコンピュータ -

「「久しぶりですヨイリー博士！」」

「あら久しぶりスバルちゃん、ミソラちゃん。今日は何の用かしら  
？」

スバルは話した。

「実は、メテオGがないのにファイナライズが出来たんですね。」

「わかつたは、調べてみましょ。ちょっと待つてちょうどい。」

- 数分後 -

「スバルちゃん、わかつたわよ。」

「で、原因は……」

「実はスバルちゃんのハンターV Gに新たなサーバーがあつたわ。それは「ノイズサーバー」よ……」

「ノイズサーバー？」

不思議そうなスバル。

「スバルちゃんはシリウスと闘つたわね。その時にシリウスがサーバーを作つたのよ……」

「そうですか。ありがとうございました。」

そうして二人はサテラポリスへ向かつた。

## 新たなサーバー（後書き）

今回短くてすいません！感想待ってます！

## 組織の正体

- サテラポリス -

「スバル！わかつたぞ。」

「どうだつたんですか？」

暁は画面に男の画像を出した。

「WWWは2000年ほど前にあつた組織だ。その時のボスはDr. ワイリーだ。しかしWWWは壊滅した。」

「何故ですか？」

「光 熱斗によつてだ。知つてるだろ。」

「ハイ、そつなんだ。」

少し感動したスバル。

「しかしワイリーには子孫がいた。」

「子孫…」

「その名はDr. ルーシ、そいつが新生・WWWのボスだろつ。だが何故オーパーツを集めか不明だ。」

「そつですか。ありがとつございました。」

「いや、じつはありがとうございました。」

そう言って二人はWAXAを後にした。

- 謎の場所 -

「報告します。ハーブ・ノート が死にました。」

「そうか、だがどうでもいい。あれは捨て駒だ。ところでオーパー  
ツは見つかったか?」

「すいません、後少しです。」

「そうか、急げ!」

「はっ!」

つづく

## 組織の正体（後書き）

短くてすいませんー感想待つてます！

## 旅行の行き先と謎の予言

- 数日後 教室 -

教室にはルナ、ゴン太、キザマロ、ジャック、ツカサ、スバル、ミソラがいた。

「みんな明日から『ゴールデンウィーク』よ。だけど普通の『ゴールデン  
ウィーク』じゃつまらないからみんなで旅行に行くわよー！」

「やつたー！」

みんな喜んでいた。

「この後場所決めるから私の家に集合よー。」

そしてみんなは急いで帰った。

- ルナの家 -

そこには一つの机を囲むように座っていた。

「みんな意見を言って。」

するとキザマロは

「僕はシーサー・アイランḍですね。」

「俺も賛成だ。」

ゴン太とジャックは揃って言った。

「スバル君とミンラちゃんは？」

「私はどこでもいいよ。」

「僕はビーチストリート。」

「あらいいわね。じゃあビーチストリートに決定ね。出発は明日の朝8時、2泊3日よ！遅れないようついでに、こつじてみんなは解散した。」

- 帰り道 -

「楽しみだねスバル」

「もうだねミソラ」

「ねえ、ホールデン・ウイークの最後の日にビーチストリートに行こー。」

「いいよ。どこがいい？」

「スピカモール」

「いいよ。」

そして二人は帰つた。

-スバルの部屋 -

スバルは夢の中で目が覚めた。

「…」

そこには白い空間だった。

するとスバルの前に黒い人らしき物が見えた。

-もうすぐお前の世界で大変な事が起こる。だが過去から戦士が来るだろ？… -

「待つて…」

しかし黒い物は消えた。

そしてスバルは夢の中で意識が薄くなつた。

つづく

## 旅行の行き先と謎の予言（後書き）

次回から旅行編です！感想待ってます！

旅行・機内・正体編 -

- 翌日 -

「さあ行くわよ！」

そつとみんなは空港へ向かった。

- 機内 -

席はルナ、キザマロとゴン太、ジャックとツカサ、スバルとミンカラ  
だ。

「なんか楽しいね」

そしてスバルの腕に抱きついた。

しばらくすると、ミンカラの顔がスバルの肩に乗ってミンカラは寝た。

- 数分後 -

ミンカラは起きた。隣を見るとスバルは眠そうだった。

「ごめんスバル、寝ていいよ。」

「ありがとうミンカラ」

そしてスバルはミソラの肩に顔を乗せて寝た。

「スバルの寝顔かっこいい」

と思うミソラだった。だからスバルが起きるまでスバルの寝顔を見ていた。

・さらに数分後・

スバルは目が覚めた。時計を見ると、12時だった。

ピンポン～

すると機内食が配られた。それは高級料理のフルコースだったので、みんな嬉しそうに食べた。

ミソラはデザートを8回もおかわりした。それにはみんな驚いた。

ついで飛行機はピーストリーへ向かった。

・日本WAXA会見室・

そこには長い机に長官、大吾、暁が座っていた。

記者が質問した。

「ロックマンの正体は大吾さんの息子の星河スバル君だと。」

「そうです。」

「では息子に地球を任せる時何かと思いましたか?」

「はい。息子に地球を任せるにほとも心配で反対していました。でも俺の息子だから任せました。」

こうしてスバルの知らない間にロックマンの正体が世界中に知らされていった。

つづく

短っ！感想待ってます！

- 旅行・自由時間編 -

- ビーチストリート -

「 ああ 着いたわよ。」

ルナがそつ言うとみんなは背伸びをした。

「 これから自由時間よ。 集合は1-1時、ここへ集合よ。」

そしてバラバラになった。

- スバル、ミソラ -

二人は手を繋いで歩いていた。

「 ビー行くミソラ 」

「 じゃあ買い物しよ 」

「 えつ ! 」

スバルが反論する前にミソラに引つ張つられた。

- 数時間後 -

ミンラは「機嫌だったが、スバルは疲れていた。

するとスバルはある店を見つけた。

「あそこに行こ。」ミンラ

「なんであるの〜！」

今度は逆にスバルが引っ張った。その店は星だらけの店だった。

・店の中

「凄いな…」

スバルはずつと望遠鏡を見ていた。

ミンラはつまらないそぶりだった。

「スバル！」

「向こうミンラ？」

「お土産見よつ

「いいよ。」

そうして一人はお土産コーナーへ向かった。

・お土産コーナー・

「父ちゃんと母ちゃんは何にする?..」

「これなんかどうスバル。」

「それにしょ。」

二人は順調に選んで行つた。するとスバルは

「僕達のも買おうー。」

と提案した。

「じゃあこれにしょ お揃いだから。」

ミソラがだしたのは流星に音符があるストラップだった。

「なんか僕達みたいだね。」

そう言って一人は買い、集合場所へ行つた。

「なんで腕組むの？」

「いいじやん」

つぶく

旅行・夜の出来事編 -

- ホテルロビー -

「みんなチェックインしたわね。じゃあ今から部屋へ行った。

- ルナの部屋 -

ルナ以外驚いていた。

「ヤエバリゾートより凄いね。」

スバルは言った。

「じゃあ各部屋に行って5分後に私の部屋に集合よー。」

そして解散した。

- スバルの部屋 -

「初めての一人部屋だ！やつとベットで寝れる。」

『ホントだな！』

「そりいえばロック久しぶりだね。』

『ずっとハープの奴に監禁されてた。青春を邪魔するなって。電波

変換する時だけ出れた。

スバルはずつとウォーロックの愚痴を聞いていた。

「そろそろ行くねロック。」

ウオーロックを無視するようにルナの部屋へ行つた。

「じゃあ今から献血食を食べてきて。全部無料だから。」

「 無料 」 と 並んで 「 一 . 」 が ある。

ルナ以外驚いた。

みんな改めてルナは大金持ちと実感した。

- レストランラウンジ -

「美味しいねミソラ」

「そうだねスバル」

一人は周りから見ても分かるくらいイチャイチャしていた。

するとミソラが、フォークに肉を刺してスバルの口の前にだした。

「ハイ、あ～ん」

いつも反対するスバルだったが、今回は素直に食べた。

「スバルおいしい？」

「おいしいよ」

「間接キス出来た」

「そうだねミソラ」

「なんか変だよスバル…」  
するとスバルは妙に動搖した。

「だ、大丈夫だよミソラー！」

「ならいいけど…」

少し心配なミソラだった。

-数時間後-

「さあ、明日は遊ぶから早く寝るわよ。」

そしてみんな解散した。

-廊下-

ミソラは落ち込みながら部屋に向かっていた。

「スバルがいないから寂しいな…」

『だったら…したら?』

ハープがミソラに助言すると、ミソラは明るくなり、「そうしよう!」

そう言つてミソラはスバルの部屋に行つた。

-スバルの部屋-

コンコン

「ハイ!」

ノックされたので、ドアを開けた。

そこにはミソラがパジャマ姿で立つていた。

「スバル 入つてい?」

「なんで?」

「スバルがいないと寂しいから…」

スバルは仕方なく入れた。

「ねえスバル 明日楽しみだね」

「そうだね そろそろ戻つたら…」

「するとミンカラが少し怒りながら、

「やだー一緒に寝たい！いや、一緒に寝るー。」

「（仕方ない、ライトから教えてもらつたのを使おつ…）

するとスバルはミンカラをベッドに座らせた。

そしてスバルはミンカラを押し倒した。さらに口を塞いで、もう一つの手でミンカラの胸を触った。

「（なにすみのスバル！恐いよ…やめて…）」

しかしそバルはミンカラのパジャマの裾に手を掛けた。

「（こや…やめて…スバル嫌い！）」

ミンカラの皿には涙がこぼれていた。

するとスバルはやめた。

そしてミンカラを泣いているのを見て

「早く戻つてミンカラ…」

するとミンラはスバルを叩いた。

「スバルの変態！スバルがそんな事するなんて思わなかつた！」

スバルが謝ろうとするといソラが遮つた。

「私怖かつた……」

そんなミンラを見てスバルはミンラを今までより強く抱きしめ、キスをした。

数分すると、スバルはキスを止め、説明した。

「『いめとミンラ…』ライドが断る時はこれしたら絶対断るって言つたから……」

「言い訳は聞きたくない！」

ミンラは怒鳴つた。しかしそスバルはそれより大きな声で、

「僕の話を聞いてくれ！」

するとミンラは黙つた。

「こんな事していくうちに僕は悲しかつた。だから途中で止めた。ミンラのこんな姿見たくなかった。一緒に寝るから許して。」

ミンラはしばらく黙つた。そして、

「わかつたわ許してあげる。じつはね、私少し嬉しかった。スバルが平氣してくれて、彼女だつて風に見てくれて。」

「ミンク… ありがと…」

そう言ひてミンクに飛びついた。

「ちょっと、まだ許した訳じゃないよ…」

するとスバルは離れた。

「何したらしいの？」

ミンクは笑つて

「私の言つ事なんでもして」

「いいよ。何して欲しい？」

「まづキスして」

「また…」

するとミンクは頬を膨らませ、

「許さないよ…」

「わかりました。どれくらいして欲しい？」

「私がいいと言つまで。」

そうしてスバルはキスをした。

- 10分後 -

「 もういこよ 」

ミンクは止めて言った。

「 ジャあおやすみー 」

スバルはベッドへ行こうとするといつに止められた。

「 一緒に寝るのー 」

「 わかりしるよ 」

そうして二人はベッドに寝た。

- WAXAメインコンピュータ -

ヨイロー博士がキーボードを打っていた。

「 やつと完成したわ。後は渡すだけね… 」

画面には5体のウイザードが写っていた。

八九〇

**旅行・夜の出来事編 - (後書き)**

次回旅行編が終わります。感想待つてます！

-朝-

「ふあ～～。」

スバルは目が覚めた。今回もスバルが早かつた。

「起きてミソラ…」

眠そうなスバル。しかしミソラはなかなか起きないので、スバルはいつもミソラにされている事をした。

「んっ、んんんんん！」

(訳)何するのスバル！

スバルはキスを止めると、ミソラは赤くなつて怒つた。

「何するのスバル！…」

「いつもの仕返し でも嬉しかったんじゃない？」

するとミソラは黙つた。そして、

「確かに嬉しかったよ…」

勝ち誇つた顔を見せた。しかしミソラは負けずに言い返した。

「でも私の言う事聞かないといけないよ」

今度は逆にミソラが勝ち誇った顔を見せた。

「わかった、何して欲しい?」

渋々聞くと、ミソラは

「昨日の続きをして」

「ええええええええええ！」  
とても驚いたスバル。

「嘘だよ」

ミソラが笑顔で言つと、スバルは安心した。

「じゃあ朝食食べに行こー」

そうして朝食を食べに行つた。

今回はみんなで食べたのでスバル以外ミソラの食欲に驚いた。

そして、海へ行つた。

- 海 -

「さあ泳ぐわよー。」

そう言つとみんな海へ行つた。

この頃ウイザード達は砂浜でビーチバレーで遊んでいた。

- 数時間後 -

「楽しかった！」

スバルが言つとみんなうなづいた。

- さりに数時間後 -

みんなはホテルにいた。

そして解散した。

- スバルの部屋 -

「今日は疲れた～！」

『確かに今日は疲れたな！』

スバルはハンターV Gを見た。そこにはメールがあった。

「誰だ？」

それはヨイリー博士からだつた。

-遊撃隊のみんなへ

旅行中『めんねえ。さつそくだけど、旅行が終わつたらWAXAに来てちょうだい。渡したい物があるの。-

「なんだろう渡したい物つて？」

『何かの武器か？』

「なんでロックはいつもそういうの？」

コンコン

部屋にミソラ、ジャック、ツカサが入つて來た。

「メール見た？スバル君。」

ツカサが言つと、みんなうなづいた。

「とりあえず終わつたら行こうぜ！」

ジャックの提案にみんな賛成し、解散した。

-数時間後-

みんなはルナの部屋で旅行の話をしていた。

ルナが時計を見ると、もう9時だつた。

「みんな早く寝なさい。明日出発早いわよ。」

スバルは立ち上がりうとすると、つまずいて倒れそうになつた。しかも倒れる先にはミソラが座つていた。

「きや！」

「わっ！」

ミソラにスバルが乗つかつた。一人は見つめ合つていた。

しばらくその状態が続いた。

「早くどきなさいスバル君！」

「い、委員長！」

スバルは急いでどいた。

ミンナはつまらなそうだった。

「なんだもう終わりか、もうちょっとあのままが良かつた！」

ミンラが言うとルナはさりに怒り、

「あなた達は友達なんだからねーしかも場所を考えなさいー。」

するとミンラが笑顔で、

「大丈夫だよ」

スバルは安心したが、

「私達付きあつてるもん」

するとスバルは泣きそうになつた。

「（なんて事なんだミンラー。）

ルナの周りには黒いオーラがあり、ミンラ以外隠れていた。スバル

も隠れようとするとい

「スバル君は待ちなさいー！」

そうして説教は30分以上続いたらしい…

-数分後-

『とんだ災難だつたなスバル…』

「ホントだよ！」

ロックが慰めるように言ったので、少し楽になつたスバル。

コンコン

ミソラが入つて來た。

さつそくスバルはミソラを少し怒つた。

「なんであそこであんな事言つのー！」

ミソラは泣いた。

「『めんスバル…』めんね…」

するとスバルはミソラに言った。

「したいならしてあげるよミソラ… セリキみたいに。」

するとミソラは少し泣き止んで

「じゃあして…」

一人はベットに横になつてスバルが上に乗つた。

さらに一人は抱きあつた。

するとミソラが

「キスして…今までより長く…」

するとスバルはミソラにキスした。

- 数十分後 -

「もういいよスバル」

ミソラは止めて言った。

「そろそろ寝ようか、一緒に」

スバルが提案するとミソラは勿論了解した。

「ねえ、いつも寝る前にキスして」

スバルは少し考え

「いいよ」

こうして二人はキスをして寝た。

- 外 -

『スバル君はやるわね！ミソラ扱い方がわかつて来たわね。』

ハープが嬉しそうに話した。

『俺は可哀想に思つぜ……』

『ガサツなアンタは分からぬわよ！』

相変わらず喧嘩していた。

- 翌日機内 -

- お客様にもうしあげます。ただ今上空が荒れでおり、2時間以上遅れます。心からお詫び申し上げます。 -

そして家に帰ったのは8時だった。

二人は夕飯を食べ、風呂に入り部屋へ行つた。

- 部屋 -

「ミソラ明日デートに行けなくなつてごめんね…また今度行こうー。」

「いいよ また行こうね 」

二人は笑顔で話していた。

「おやすみミソラ 」

「おやすみスバル 」

ミソラが口を近づけ、スバルはキスをした。

そうして一人は寝た。

勿論抱き合つて。

つづく

旅行・喜怒哀楽編・（後書き）

次回は本格的に話が進み、新生・WWWとバトルが少しあります。  
感想待つてます！

## 新しいPGM

- 翌日の朝 -

「ふあ～」

ミソラが起きた。隣にはスバルが寝ている。

ミソラは時計を見た。すると8時だった。ミソラは急いでスバルを起こした。

「スバル！ 起きて！」

スバルは起きた。スバルも時計を見て驚いた。

二人は急いで朝食を食べ出発した。

- WAXA -

一人が来ると、ツカサとジャックがいた。

「おせえぞスバル！」

「「めん。」

「みんな揃つたわね。」

ヨイリー博士が出て來た。

「今からあなた達のハンターVGにデータを転送するわ。」

みんなハンターVGを見ると、何かダウンロードされていた。

するとスバルは

「シュー・ティング・スターPGM（今後SSSPGM）？」

ミソラが

「ハープPGM（今後HPGM）？」

ジャックが

「フェニックスPGM（今後FPGM）？」

ツカサが

「ハレキPGM（今後EPPGM）？」

みんな不思議そうに言った。

「今みんなに転送したのは新しいPGMよ」

スバル以外嬉しそうだった。

「ヨイリー博士、僕のHースとジヨーカーはどうなったんですか？」

心配そうに聞く

「それならシダウちゃんに返したわよ。」

スバルは安心した。

「今から説明するわね。まずスバルちゃんのは今までの全ての変身が出来るわ。」

「『すいじー』」

スバルとロックは驚いた。

「//フリちゃんはバトルカードが使って、攻撃に属性がつくわ。」

「『スイー』」

//フリとハープは畳然としていた。

「ジャック君は雷属性の攻撃が出来るわ。後は//フリちゃんと一緒に上。」

「『やつた！』」

一人は喜んだ。

「ツカサ君はミンラちゃんと同じで、炎属性の攻撃が出来るわ。」

ツカサはあまり驚かなかった。

「後みんなある事をすると、究極の変身が出来るわ。スバルちゃん以外はファイナライズが出来るわ。スバルちゃんは分からぬわ…」

「分からぬ？」

「ええ、でも出来るから安心して。で、ある事とは決意と絆よ。まあ自分で見つけてね。」

するとみんな考えだした。

「数十分後」

「みんな試してみる？」

そして試しにバトルした。

「数時間後」

「 「 「 「 みんな帰った。」 」 」

みんな帰った。

帰る

## 新しいPGM（後書き）

バトル書けませんでした！すいません！感想待ってます！

## オーパーツ捜索と戦い

-数週間後-

電話がなつた。それは暁だつた。

『スバルオーパーツを一つ見つけたぞ！場所はナンスカ！種類はダイナソー！』

「わかりました。今から行きます。」

するとミンラが

「私も行きたい！」

『わかつた！行つてこい！』

そう言つて電話が切れた。

-数分後-

そこにはロックマンとハープ・ノートが歩いていた。

「なんで腕を組むの？」

「いいじやん 彼女なんだから」「

「わかつたよ（遅れそうだな）」

スバルの予想通り、30分遅れた。

- 基地 -

「見つけたぞ！ オーパーツ…さつそく取りに行け！ シャドウ、サイクロンを連れて行け！」

「はっ！」

シャドウは研究室に行って、サイクロンと書かれた力プセルを持ち開けた。

『お呼びですかシャドウ様。』

体が風で紳士みたいなウィザードだ。

「オーパーツを取りに行け！ 邪魔する奴は消せ！」

『了解』

サイクロンは消えた。

-ナンスカ-

「久しぶりに来た！」

スバルは言った。

「スバル来た事あるんだ。」

以外そこにミソラが話すと、

「そっか、ミソラは来た事無いんだ。ムの時に委員長とゴン太とキザマロと一緒に来たんだ。」

スバルが説明すると、

「いいな、私もスバルと二人で旅行したいな」

ミソラがつらやましそうに言いつと、

「いつか行こう」

「そうだ…んつ！」

スバルは言った後キスした。

ドーナン

遠くで爆発が聞こえた。

「「何！」」

二人は言った。

『わからねえ！なんか電波体が暴れているぞ！』

ウォーロックが言うと、一人は爆発した所に行つた。

- 遺跡 -

二人は電波変換して来ると、そこにはサテラポリスのウイザードが倒れていた。

「なんだこれは…」

『上だスバル！』

驚いたのもつかの間、上を見るとサイクロンがいた。

『ばれましたか。私の名はサイクロン…新生・WWWのウイザードです！』

「またWWWか。何が目的だ！」

『私の目的はオーパーツです。』

「何！」

スバル達は驚いた。

するとサイクロンが

『おやあなた達もオーパーツを探しているのですか。なら邪魔させません!』

サイクロンが襲つて來た。

『フォースサイクロン!』

するとサイクロンの周りに四つの竜巻ができ、一人に向かつて來た。

「タイフーンダンス!」

ロックマンが竜巻を消すと、さうにロックマンは攻撃した。

「キャノン+マピプラス、マッドバルカン、ヒートアップ!」

サイクロンは全てくらつた。

しかしサイクロンはロックマンの隙をついて、

『フレイムサイクロン!』

炎の竜巻を出した。

ロックマンは竜巻を消したが、その瞬間サイクロンはロックマンに攻撃しようとした。

「サンダーショックノート!」

雷の音符がサイクロンを襲い、体が麻痺した。

ロックマンは

「チャージショット！」

『うわ――――!』

するとサイクロンが死に際に、

『お前達と闘つて楽しかったぞ……いや、嬉しかった。この気持ちはなんだ?』

するとスバルは笑顔で言った。

「それは絆だよ！僕達は友達だよ！」

『友達か……初めての友達だ……私は死んでも電波として生きている。また会おうきっと力になるだろう……名前は？』

『星河スバル！スバルって呼んで！』

『わかったスバル……オーパーツは奥にある。さよならスバル……』

そう言うとサイクロンは消えた。

「さよならサイクロン…」

こうして一人はダイナソーを見つけた。

つづく

## オーパーツ 捜索と戦い（後書き）

久しぶりにバトル書いた。感想待つてます！

過去へ出発！！

-数週間後-

「スバル！起きて！」

ミソラが必死にスバルを起こさせようとしていた。

「今日はテートに行くんでしょ！」

しかしスバルは起きない。

「もういい！知らない！」

ミソラが怒って部屋を出ようとすると、スバルに手を掴まれた。

「ミソラ……好きだ…」

「えつ！」

「私の夢見てるんだ」「

ミソラは寝言だったが、嬉しくなった。

そつ言ひでミソラはまたスバルを起こそうとした。

今度はキス作戦を使った。

「んんんんんん！！」

スバルは息が苦しくなり、目が覚めた。

「起いりますなり普通に起こしてよ//ソラーハー」

顔を赤くしながら言つた。

「起きなかつたスバルが悪いーー！」//ソラーハが反論すると、スバルは黙つた。

「や、早く仕度してデートに行こー。」

（

スバルと//ソラのハンターヴGが鳴つた。

見るとヨイロー博士からだつた。

・スバル（//ソラ）ちゃん悪いけどMAXAに来てちょうだい。

メールを見て//ソラはがっかりした。

「デート行きたかったな…」

「いの用事が終わつたら行こー」

スバルが慰めると、//ソラうなづいた。

- WAXAメインコンピュータ -

二人は入つて來た。

「何の用事ですか。」

スバルが聞くと、ヨイリーは説明した。

「二人ともクロックマンを覚えてるかしら？」

二人はうなずいた。クロックマンはミソラを過去へ連れて行つた奴だ。

「そのクロックマンのタイムスリップ能力が使えるPGMを作つたの。今日は過去へ行つてもらうわ……約200年前に！」

二人は驚いた。

「「なんで？」」

「オーパーツを取りに行つてもらうわ……早くしないとWWWに取られるわよ。」

「「わかりました！」」

するとヨイリーは笑顔になつて

「いい返事ね！ちょっと待つてちょうだい。」

-数分後-

液体が入ったタンクがあった所にはタイムホールがあった。そして二人は電波変換した。

「いい、チャンスは一回よ！」

「「ハイ！」

「じゃあいってらっしゃい！」

二人はタイムホールに入った。

つづく

過去へ出発！－（後書き）

次回は熱斗とメイルが登場します。感想待っています！

## 再会

-過去（約200年前）-

インターネットに着くと、ロックマン（以後エグゼ）とロールが腕を組んでいた。

「スバル君とミソラちゃん！」

エグゼとロールが驚いていた。

「久しぶりだね！」「一人とも」

スバルが言つと、ミソラとロールをそっちのけで喋つていた。

するとエグゼが

「熱斗君呼んでくるよー。実は最近熱斗君がインターネットに来れるようになったんだ。」

「メイルもよ。」

そう言つてエグゼとロールはプラグアウトした。

「ねえスバル、誰？」

ミソラが聞いてきたので、スバルはあの事件の事を話した。

話し終わると、エグゼとロールがやって来た。

「あれ？ 热斗君とロールちゃんは？」

「ああ俺達だよ。」

スバルとミソラは驚いた。

しばらくすると、四人は久しぶりに喋った。

「数十分後」

「で、何しに来たの？」

热斗が聞くと、スバルは答えた。

「探し物だよ！」

「「ふーん」」

热斗とメイルはハモつた。

「ねえ热斗、私達も探そうよ。」

「そうだな、手伝うよ。」

「ありがとう。」

そう言つて四人はオーパーツを探した。

- 犬小屋の電腦（熱斗の家） -

「熱斗、ここにあるの？」

「あるだろ？。」

少し心配になる三人だった。

すると奥にベルセルクのオーパーツがあつた。

これは四人驚いた。

スバルが取ろうとすると、上から

『それは僕のだよ！』

とカラードマンがいた。

「「カラードマンー！」

熱斗とメイルは答えた。

しかしカラードマンは着地すると四人に一斉に攻撃され、カラード

「マンはデリートされた。

『僕の出番少なつ！』

そうつ言って消え、スバルはオーパーツを回収した。

-数時間後-

「じゃあ僕達は帰るよ！」

スバルとミソラはタイムホールの前にいた。

すると熱斗が

「なあスバル、未来では戦いがあるのか？」

スバルはうなずいた。すると熱斗は少し考え、

「俺も未来に行くよ！」

三人は衝撃を受けた。

「でも、いつ戻れるか分からぬよ！」

スバルは必死に反論した。

「そうだよ熱斗、ここにいてよ！」

メイルも反論した。

しかし熱斗は

「いや、行く！」

と言ひ事を聞かなかつた。  
するとメイルも

「熱斗が行くなら私も行く！」

「メイルは残つていろ！」

「いや！私は熱斗をどこでもサポートするのー！」

熱斗は觀念して

「わかつた一緒に行こう」

そして四人はタイムホールをくぐつた。

- WWW基地 -

「ルーシ様。ハープ・ノート、サイクロン、カラードマンが死に  
ました。」

「放つておけ！所詮捨て駒だ！」

「分かりました。」

「シャドウ、あれは進んでいるか?」

「少しづつですが

「まあよかひひ進む。」

「まつ。」

へび

## ウェブライナーの中

- 現在 WAXA -

タイムホールから四人が出て来た。

「それは誰？」

ヨイリーは聞いた。

四人が電波変換とクロスフュージョンを解いた。

そしてスバルは過去の出来事を話した。

「そうなの……わかったわ！スバルちゃんの家に住みなさい。後はこちらでするから。今日は帰つて。」

そして四人は帰つた。

- ウェブライナー -

「そういえば一人とも6年生になつたの？」

「ああそうだぜ！スバルもだろ。」

「やつだよ熱斗君。」

「あ、熱斗でいこ。」

一方女子は

「ねえメイルちゃん！熱斗君の事が好きなの？」

ひやひや声で聞いた。

「うん、好き。」

赤くなりながら言った。

「//フリちゃんはスバル君と//合つてゐるんでしょ

//ソラも赤くなりながら

「うん。あと//ソラでいこ。メイルって呼ぶから。」

「わかった//ソラ。」

「で、いつ熱斗君に告白するの？」

メイルは困った顔をして

「分からな…」

「だったら今日告白しなよ！私もいきなり告白していけたから。」

メイルは

「わかつた！スバル君の家に挨拶したらするー。」

こうしてウヨブライナーの中では盛り上がりっていた。

つづく

## ウエブライナーの中（後書き）

短くてすいませんー感想待つてます！

## 新たなカップル

-スバル家 -

「 「ただいま！」」

「 「お邪魔します！」」

「 「お帰りなさい。熱斗、メイル、ただいまでしょ！」」

「 「ただいま！」」

そして四人はスバルの部屋に行つた。

-スバルの部屋 -

「へー、これがスバルの部屋かー、宇宙の本ばつかだな！」

「ホント熱斗と大違い！」

熱斗とメイルは少し喧嘩していた。

するとエグゼが

『止めなよ一人とも！』

エグゼが終わらした。メイルは何かを思い出したのか、

「熱斗！ちょっと来て！」

メイルは熱斗を連れ出した。

「がんばってねメイル！」

「なんで応援したのミソラ？」

「それはね……だから」「

スバルは納得し、笑った。

-展望台 -

「ねえ熱斗私ね、熱斗の事が…」

「俺がなんだよ…」

メイルは赤くなつて

「熱斗の事が好き！」

熱斗は驚いた。しばらくしても熱斗は答えを言わなかつた。

「どうなの熱斗ー。」

「わかんねえ。」

「えつー。」

意外な答えで驚いたメイル。

「わかつた！俺はメイルが好きなんだーだからメイルを守るうじ  
たんだ。」

『今頃気付いたの熱斗君ー。』

『鈍感ねえ！』

エグゼとロールにつつこまれた熱斗。

「ありがとう熱斗ー。」

そう言つてメイルは熱斗に抱きついた。

「離せよメイル！」

「いいじゃん 彼女なんだから ー。」

展望台では新たなカップルが生まれた。

ՀԱՅ

## WWWの目的

-スバルの家 -

「「ただいま！」」

「お帰りなさい。」

熱斗とメイルは帰ると、スバルの部屋に行つた。

-スバルの部屋 -

部屋は甘い雰囲気になっていた。

「離してよミソラー！」

「離せよメイル！」

スバルと熱斗はそれぞれ抱きつかれた。

「いいじゃん スバル」

「彼女なんだから」

二人は離さなかつた。

「スバルー＝ソラ－熱斗－メイル－」飯よー。」

茜が呼んだので、二人はやつと離した。

「（（ぬわんナイスー））」

とは反対に、

「（（まだしたかつたな…））」

いひして四人は一階に行つた。

・リビング・

夕飯を食べると、大吾が帰つて來た。

「熱斗、メイルプレゼントだ。」

そう言つて渡されたのは一台のハンターV Gと一枚のカードだった。

「これはクロスフュージョンのカードとハンターV Gだ。P E Tは持つておけよ。」

そして熱斗とメイルはエグゼとロールを転送した。

『居心地いいね！』

『ホントー！』

しばらくして再び夕飯を食べた。

夕飯中熱斗は聞いた。

「そういえば俺達どこで寝たらいいんだ。」

「スバルの部屋よ。熱斗とメイルで一緒に寝なさい。」

熱斗は驚いて喉をつまらせた。

夕飯を食べ終わると、熱斗はスバルに提案した。

「スバル、ウイルス倒しに行こうぜー！」

「いいよ。ミソラとメイルちゃんは。」

二人は首を横に振った。

-ウヨーブロード-

「はつ！」

「おりやー！」

二人は順調に倒して行つた。

するとハデスが現れた。

「久しぶりスバル！」

「久しぶりライト！今日は何の用事？」

「言ひつけ。それより誰？」

ライトが聞くと、スバルは説明した。

-数分後-

「へー、この人が私のご先祖様なんだ！」

「「そうなの！」」

スバルと熱斗は驚いた。

「さうよ、私の名前は光  
て！熱斗さんも！」

ライトだもん。それより私について来

こうしてハヂスに付いて行くと、ノイズウェーブの前にいた。

「ライト…どこ行くの?」

「裏インターネット。」

スバルと熱斗は首をかしげた。

「スバルはアポロンがいた所って言つたらわかるかな? 热斗さんはWWWやゴスペルって言つたらわかるかな?」

こう言つと一人は納得した。

そして三人はノイズウェーブに入った。

-ちょうどその頃スバルの部屋 -

「がんばってるかな二人とも。」

「がんばってるんじゃない。」

話していると、

『ミソラ！スバル君と熱斗君の前にハーブが現れたわ！』

ハーブが言ったので、メイルは聞いた。

「ハーブって？」

「女の子！」

ミソラは怒っていたので、その事しか言わなかつた。

「ホント…」

メイルも怒り、

「ハーブ！行くよ！」

「ロール！行くよ！」

電波変換とクロスフェュージョンをした。

しかし、

『駄目…消えた。』

一人はさらに怒つた。

「「ビ」」で…」「

『展望台で。』

ハープが言つと、一人は展望台へ向かつた。

-裏インターネット-

「ねえライト、なんでこいなの？」

「いいでしか私のウイザードが出れないから。」

そう言つてライトはウイザードONした。

「『フォルテー。』」

熱斗とエグゼが言つた。

『久しぶりだな熱斗、ロックマン（エグゼ）』

「誰？」

スバルは聞いた。

「裏インターネットの支配者よ。」

「へー、そりなんだ。」

「でも俺はフォルテが人間と一緒にいる事が嬉しいな！」

-数分後-

「それで二人とも、本題に入るわよ。」

二人は黙つた。

「実は新生・WWWが電波テクノロジーを破壊しようとしてるの。」

二人は衝撃を受けた。

「破壊されたら世界が大変な事に…」

スバルは恐れた。

「だから私達で阻止するの。」

しばらく沈黙が続いた。

「今日はメンバーを紹介するね。遊撃隊のみんな、熱斗さん、メイ  
ルさん、私、そして剣太。」

「「剣太?」」

すると一体の電波体が現れた。

その電波体は体が赤く、右手は赤い剣があった。

「炎山?」

『ブルース?』

「誰?」

「紹介するね、伊集院 剣太 伊集院 炎山の子孫よ。」

「これが炎山の子孫かー！」

熱斗は嬉しそうだった。

「遊撃隊のメンバーは紹介したから。」

「ミソラも?」

「メイルも?」

「まだよ。あなた達から言つといて。」

「「わかつた！」」

二人はうなずいた。

「今日は解散！早く帰ったほうがいいんじゃない？」

「「あつー！」」

そう言つと一人は大急ぎで帰つた。

「面白い。」

ライトは呟いた。

・展望台・

二人は電波変換を解いた。

すると後ろに黒いオーラが一つ感じた。

恐る恐る振り向くと、ミソラとメイルがいた。

「スバル～！」

「熱斗～！」

「（どうする熱斗～）」

「（あれしかないだろスバル～）」

二人は顔を合わせうなずいた。

「「逃げる～～～！！」

二人は叫んで逃げた。

「「待ちなさい～～～！」

ミソラとメイルは追いかけた。

「～に逃げるスバル～！」

「家の僕の部屋～！」

そう言ってスバルと熱斗は家に逃げた。

つづく

## WWWの目的（後書き）

新しいキャラクターが登場しました。ライトは熱斗の子孫だったんですね。感想待っています！

説教

-スバルの部屋 -

スバルと熱斗は部屋に入り、鍵を閉めた。

「これで大丈夫だろう。」

「そうだなスバル。」

二人は息を切らしながら、安心していた。

-スバルの部屋の前 -

「あつ 鍵閉められた。どうしようミソラー！」

「大丈夫だよ 私に任せて！」

-スバルの部屋 -

「これからどうするスバル？」

「しばらぐ！」に、よ熱斗。多分入れないから。」

「やうだなスバル！」

二人は楽しそうに喋っていた。

その会話を壊すようにウォーロックが言った。

『笑つてのも今の内だぜ二人とも。』

そう言つたすぐ後、

「「もう逃がさないよー。」」

恐れている声が聞こえた。

振り向くと、電波変換したミソラとメイルがいた。

解いて、スバルと熱斗は別々で説教された。

・スバルとミソラ・

「「の前行く時私に言つてつて言つたよね！」

「「めん！忘れてた。」

必死に謝つてるスバル。

「心配したんだよスバル…」

この言葉でスバルは安心したのか、

「なんでもするからミソラ」

そう言つてスバルはミソラにキスすると、優しく抱きしめた。

「今度は本当に知らせてね スバル」

そう言つてミソラはさらに強く抱きしめた。

-熱斗とメイル -

「なんで女の子と一緒にいたの熱斗…」

「あれはスバルの友達で…」

熱斗が必死に説明していると、

「心配したのよ熱斗…」

メイルが熱斗を抱きしめた。

すると熱斗は

「『みんなメイル…心配かけて…なんでも言ひ事聞くから…』

と言つてさらりと強く抱きしめた。

「ホントだよーじゃあキスして」

「わかった!」

熱斗はメイルにキスした。

「ふふっ！」

「何笑つてんだよメイル！」

「だつて嬉しいんだもん」

こうして四人は仲直りした。

そして長い一日が終わった。

うるべ

## 朝の出来事

- 翌日 -

ミソラとメイルは目が覚めた。

しかし二人は横になつたままだつた。

- 昨日の夜 -

「スバル！俺達はどこで寝るんだ？」

「待つて布団持つてくるから。」

スバルは布団を取りに行つた。

- 数分後 -

スバルは戻つて來た。しかしスバルは布団を一人分しか持つていな  
い。

「スバル、なんで一人分？」

「母さんがこんだけしかないから熱斗とメイルちゃんと一緒に寝な  
さいつて。」

「やつた！」

「ええー！」

「言ひ事聞くつて言つたよな。」

「わかつたよー！」

・回想終了・

と言ひ訳で熱斗とメイル、スバルとミンラは抱き合つて寝ていた。

スバルと熱斗は気持ちよさそうに寝ていた。

ミンラとメイルは寝顔を見て微笑んだ。

「メイル！起こしちゃう！」

「うんー！」

二人はスバルと熱斗の体を揺らした。

しかし起きない。

「仕方ない、あれをしよー！」

「あれって？」

ミフリはメイルに耳打ちした。

「それいいね！」

メイルは笑った。

二人はそれぞれキスした。

「「んんんんん！」」

当然スバルと熱斗は起きた。

スバルと熱斗は注意した。

「「なにするの…」」

「「いいじゃん」」

少し喧嘩した。

その後、学校では熱斗とメイルは転校生として紹介された。

つぶく

## それぞれの息子

- 数ヶ月後 -

小学校は夏休みが始まろうとしていた。

そして今いつものメンバーは終業式の最中だった。

そろそろ終わる頃、

♪

遊撃隊のメンバーのハンターV Gが鳴った。

それはヨイローからのメールだった。

- 「めんねえ今すぐWAXAに来てちょうだい。 -

だから遊撃隊のメンバーは急いでWAXAに向かった。

- WAXA -

そこにはスバル、ミソラ、ジャック、ツカサ、ライト、熱斗、メイル、剣太がいた。

熱斗、メイル、剣太は先日遊撃隊のメンバーになった。

「『めんねみんな。今日は特別メンバーを紹介するわね。入つて来てちょうどだい。』」

すると一人の少年が入つて來た。

その少年は目がエメラルドグリーンで、髪はオレンジ色、青いパーカーを着て流星の形のネックレスをしていた。身長はスバルと同じくらいで、赤いギターを背負っていた。

「自己紹介して。」

ヨイリーは笑顔で言った。

「はじめましてかな?」

「…………かな?」

一同ハモつた。しかし少年は続けた。

「星河 ベガです。」

すると部屋は驚きの声が響いた。

「ほ、僕の息子ー。」

「やつだよ父さん。」

みんなベガに質問しようとすると、//ソラが誰よりも早く質問した。

「あなたの母親は誰ー。」

「星河 //ソラ。昔は響 //ソラだったっけ？」

ベガがそう答えると、//ソラはスバルに抱きついた。

「やつたー! 私達結婚するんだー」

「響じてよ!!ソラー。」

「父やごとぬわせ世もハラブだつたんだ。」

冷やかすようにベガが言つと、

「「親をからかわない！」」

二人怒りながらハモつた。

「後、一人紹介するわよ。入って来てちょうどいい。」

するとベガと同じくらいの少年が入って來た。

その少年は髪は茶髪で熱斗と同じバンダナをしていた。そして足にはローラースケートをつけていた。

「自己紹介してちょうどいい。」

またもヨイリーは笑顔になつて言つた。

「こんにちは！光 翔理です。」

今度は熱斗が

「俺の息子！」

と驚き、メイルが

「あなたの母親は誰！」

と聞くと

「光 メイルです。旧姓は桜井です。」

「やつた！私達結婚するんだ」

そう言つてメイルは熱斗に抱きついた。

「ラブ・ラブだね二人とも。」

翔理が冷やかすように言い、熱斗とメイルは

「「親をからかわない！」」

怒られた。

「まあまあ落ち着いて。この一人には新しいPGMを渡したわ。それとこの一人はスバルちゃんの家に住んでね。」

そうしてみんなはWAXAを後にした。

・ウェブライナーの中・

ベガはスバルとミソラに質問責めだった。

「そりいえばベガは好きな人はいるの？」

何気なく聞くと、ベガは顔を赤くして、

「いるよ！」

するとスバルとミソラは笑つて

「「がんばってね！」」

ベガを応援した。

一方翔理は熱斗とメイルに質問責めだつた。

「翔理は好きな人いるの？」

何気なく聞くと、翔理は顔を赤くし、

「いるよー」

熱斗とメイルは笑つて

「「がんばれ！」」

翔理を応援した。

ウェブライナーの中ではそれぞれの家族が盛り上がり上がっていた。

-スバルの家 -

「 「 「 「 「 ただいま！」」」」」

「 おかえり！」

茜が荷物を持ちながら迎えた。

「 何してゐるの吗たこ？」

「 物置きを止付けて部屋を作つてゐるのー狭いでしょーだから手伝つてー！」

そしてみんなは手伝つた。

-物置き -

ミソラとメイルはたくさん積んである箱を取ろうとするとい、  
れ落ちた。箱はミソラとメイルは箱の下敷きになつた。  
箱が崩

「ハサウエイ」

「大丈夫か

スバルと熱斗はそれぞれ助けた。

「「ありがとう」

ミソラはスバルに、メイルは熱斗にキスした。

二人は真っ赤になつた。

それから荷物が片付いたのは2時間後だった。

七八

それぞれの息子（後書き）

次回はこの続きです。感想待っています！

## 一人の息子の挑戦

片付けが終わり、その部屋は熱斗とメイルと翔理の部屋になつた。

-スバルの部屋 -

ミソラは夕飯作りを手伝いに行つた。

残つたスバルとベガは未来はどうなつてゐるか話していた。

「父さんはWAXAで働いていて、母さんは歌手活動してゐるよ。」

「そりなんだ。ベガは今何歳?」

「12歳だよ。」

「一緒にだね。」

親子は盛り上がりつていた。

『俺は未来は何してゐるんだ?』

ウォーロックが聞くと、

「ウォーロックはハープと結婚して一緒にWAXAで働いてゐるよ。」

『何！あいつと結婚！嘘だろ！』

ベガの答えに驚いたウォーロック。

そんなウォーロックを無視してスバルは質問した。

「ベガのウェイザードはどんなの？」

スバルが聞くと、ベガの横にウェイザードが現れた。

そのウェイザードはウォーロックにそっくりだった。

「はじめまして、アルタイルです。アルと呼んで下さい。」

丁寧な挨拶で驚いたスバル。

「電波変換できるの？」

スバルが聞くと、

「できるよ。今します。トランスクード・メテオ  
以後メテオ）！」「ロックマン（

するとベガは体が赤いロックマンになつた。

「僕にそっくりだね。」

唖然としているスバルに電波変換を解いたベガが

「今からバトルしませんか？」

「いいよ。」

そしてこの後二人はバトルした。

- 热斗の部屋 -

メイルはミソワと回りじく手伝いに行っていた。

热斗は翔理に色々聞いていた。

「翔理、俺とメイルはどうしてるんだ。」

「いつもラブライブで少し喧嘩するけど仲がとてもいいよ。」

「そうか、良かった！」

热斗は笑顔になった。

「そついえば翔理のナビ見せてよ。」

「これです。」

翔理はハンター→Gを見せた。

『 いんにむかへー僕の名前はエメラルドです。』

エメラルドは緑色の体でロックマンにやつべりだった。

『 ようしぐねエメラルド君。』

『 じゅうじゅくマンさん。』

ナビ同士仲良くなるのが早かつた。『 翔理、クロスフュージョンは出来るのか?』

「 できますよーなら今から勝負しませんか。」

「 望むと嬉しいだー。」

「 「クロスフュージョンーー。」

熱斗はエグゼに、翔理はエメラルドになつた。

「 ひしてーいつの父さんはバトルをはじめた。」

つづく

## 一人の息子の挑戦（後書き）

次回はスバル対ベガのバトルです。感想待っています！

## 父子の戦い

・ウホーブロード・

そこにはロックマンとメテオがいた。

「行くよー・メテオー！」

そう言つとロックマンはファイターソードに変え、メテオに向かつて走った。

「バリア、キヤノン×3ギヤラクシーアドバンス！」

メテオも対処し、両方ダメージを食らわなかつた。

しかしこの後、両方は苦戦した。

一人はボロボロだつた。するとロックマンは

「SSPGM起動！スタートフォース！ペガサス！」

するとロックマンはペガサスに姿を変えた。

「いくよー！」

ロックマンは空高く飛んだ。

するとメテオの下に魔法陣が出て来た。

「なんだこれは…」

「ペガサスフリーズ！」

魔法陣から巨大な氷柱がメテオを襲つた。

「うわあ――――！」

「やつた！」

「まだだ！」

メテオは氷柱から抜け出し、

「NFB-サンダーシューティングメテオ！」

すると雷をまとった隕石が降り注いだ。

ロックマンは避けようとするが、

「逃がすか！」

メテオはキャノン+マヒプラスを放ち、ロックマンに当たった。

「くそ！ はつ！」

ロックマンはメテオにスプレッドガンを放ち、的中した。

そしてメテオに的中すると、隕石もロックマンに的中した。

「 「うわあ――――！」」

二人は大ダメージをくらい、立てなくなるほどだつた。ロックマンは変身が強制解除された。

二人はロックバスターを構え、

「 「 」れで決める――！」」

一人がチャージショットを放とつとすると、

「ショックノート！」

二つの音符が一人を襲つた。

「つたく怪我したらどうするの――スバルは心配かけないで――！」

「じめん!!ソラ 」

「後で言う事聞いてね 」

「俺は無視…」

ベガは無視されスバルとミソラはラブラブだった。  
そしてスバルとミソラは腕を組んで帰った。

一方その頃

とある電腦ではエグゼとエメラルドが闘っていた。

「トリプルアロー、メガキヤノン、ロングソード…！」

「メットガード！」

必死の攻防だった。

するとエグゼが

「ソウルユニゾン！ブルースソウル！」

エグゼが光に包まれ、ブルースの姿になつた。

「いくぞ！」

するとエグゼはエメラルドを何回も斬りつけた。

エメラルドはボロボロだった。

「それなら僕だって！ソウルユニゾン！ フォルテソウル！」

エメラルドは光に包まれ、フォルテの姿になった。

「はあ――――！」

エメラルドの手から紫の閃光を何十発も放った。

「うわあ――――！」

エグゼは全て当たった。そして変身が強制解除された。

「まだだ！メガキヤノン！」

エグゼが放つとエメラルドは当たり、変身が強制解除された。

しかし二人は諦めず、

「――」それで決める！――」

二人はキャノンを放とうとすると、ロールが現れた。

「止めなさい…」

ロールの一言で一人は止めた。

「怪我したらどうするの…」

「「「」めんなさい。」」

一人は謝った。

するとロールはエグゼに駆けより、抱きしめた。

「心配かけないで熱斗！」

「「」めんなメイル、後で言う事聞いてやるから」

「ホントだよ」

「僕無視…」

熱斗とメイルは翔理を無視し、腕を組んで帰った。

「ひして」一つの父子の戦いは終わった。

つるべ

## 新たな力

父子の戦いが終わった後、みんなは夕飯を食べていた。

その時大吾と茜は嬉しそうだった。

不思議に思ったミソラが、

「お父さん、お母さんなんで笑ってるの？」

すると茜が

「だつて孫が早く見れたんですもの。ねえ、大吾さん。」

「ああ。」

そんな夫婦を見てスバルとミソラは笑った。

すると熱斗が

「俺も母さんに見せたかったな。」

残念そうに言つと、

「写真撮つたらいいでしょ！」

呆れたようにメールが言つと、

「そつか！」

「ホントバカなんだから…」

「うぬさいなー。」

少し喧嘩した一人だが、すぐ終わった。

食べ終わると、

「ベガ！ 翔理！ 明日WAXAに来てくれ！ スバルとミソラと熱斗とメイルもだ！」

「「「「「なんで？」」」」」

「ベガと翔理はちょっととした戦闘テストだ。他はそれぞれテストの様子を見てくれ。」

「「「「ハ～イ～」」」」」

そしてそれ部屋に行つた。

- 热斗の部屋 -

熱斗の部屋にはベットと布団がそれぞれ一つあつた。

「じゃあお父さんお母さんおやすみー。」

そう言って翔理は布団に寝た。

「俺達も寝るか。一緒に」

「うふ」

熱斗は寝ようとかねと、メイルに止められた。

「なんだメイル?」

「おやすみのキス

「えーー。」

とても嫌がると、メイルは黒いオーラをほつした。

「言つ事聞こてくれるって言つたよねー。」

熱斗は観念して、

「わかつたよー毎日してやるよ

「いいの?」

熱斗の意外な言葉にメイルは驚いたが、すぐ笑顔になつて

そして一人はキスをして寝た。

「うん」

勿論抱き合つて。

## その頃スバルの部屋

「おやすみ父さん、母さん。」

「おやすみベガ。」

ベガは布団に寝た。

「僕達も寝よ。」

「そうだね。」

一人はベットに横になった。

ベッドの中ではスバルとミソラが話していた。

「ねえスバル。」

「何ミソラ?」

「PGMの決意と絆は何か決めた?」

スバルは少し考え、口を開いた。

「決意は決めたよ。絆は分からぬけど。」

「何?」

スバルはミソラを見て微笑みながら、

「ミソラを何があつても一生守るって。」

するとミソラは涙目になり、

「ありがとうスバル!」

スバルに力強く抱きしめた。

「なんでミソラが泣くんだよー。」

ミソラは涙をぬぐいながら、

「だつて嬉しいんだもん スバルが決めたから私も決意する!」

「何?」

今度はミソラがスバルを見て微笑みながら、

「私はあなたを何があつても一生サポートするー。」

「ありがとうミソラ。」

すると二人は意識が薄れた。

二人は目を開くと、そこは白い空間だった。

「スバル！…ど…？」

「ここにいるよミソラ」

「良かつた！」

ミソラはスバルに抱きついた。

二人は腕を組んで周りを見回した。

すると二人の前に二つの影が現れた。だんだんと影が消えると、二体のウイザードが見えた。

「あなた達は誰？」

スバルが勇気を振り絞って聞くと、

『俺の名は闇の支配者フォルテ。』

『私の名は光の支配者セレナード。』

するとスバルは

「フォルテってライトのフォルテ？」

『それは違う。俺とあいつは姿は同じだが違う存在だ。』

するとミンカラは

「あなた達は何をしに来たの？それから『はせじ』へ。」

心配そうに聞くと、

『安心しなさい。ここはあなた達の意識の中です。今回は決意したので私達の力の一部を与えます。』

「『一部？』」

二人は首を傾げると、フォルテが言った。

『当たり前だ。お前達は決意をしたが絆がまだだ。するとウォーロックがしびれを切らしたのか、』

『早く力を与えろ！』

すると二体は

『いいだろう…ロックマンには闇の力をやひつ…』

すると黒い光がロックマンの体の中に入った。

「これでいいの？」

『ああ。』

するとセレナードが

『ではハープ・ノートには光の力を与えましょう。すると金の光がハープ・ノートの体の中に入った。』

全て終わると、セレナードが

『あなた達にヒントをあげましょ。絆は相手に対する思いです。』

「思い？」

『ああそうだ。』

そう言いつとセレナードとフォルテは消えた。

スバルとミソラは現実に戻った。

「「思いか…」」

一人は眩き考えたするとミソラが

「もう寝ようスバル！」

「そうだねミソラ、おやすみ」

「おやすみスバル」

二人はキスをして抱き合つて寝た。

こうして二人は新たな力を手に入れた。

つづく

## 新たな力（後書き）

今度から1日一話更新します。感想待ってます！

## テスト

- 翌日 -

六人は朝食を食べていた。

「早く食べなさい！遅刻するわよ！」

茜が言うと、みんな急いで朝食を食べ、出発した。

- WAXA訓練第一室 -

そこにはアシッドエースとメテオがいた。その硝子越しにスバルとミソラはいた。

「よし！始めるぞ！」

するとメテオはすぐに攻撃した。

そして二人は必死の攻防だった。

その頃スバルとミソラは戦いを笑顔で見ていた。

「スバル、私達の子供とても元気だね。」

「さうだねミソラ 後ベガが言つてたよ。とてもラブラブだつて。」

「当たり前だよ！ だつて私達は夫婦だもん。」

そして二人はキスをした。

-訓練第一室-

ここもクインティアとエメラルドがいて、硝子越しに熱斗とメイルが見ていた。

「それじゃあ始めるわよ。」

そう言うとクインティアが攻撃した。

こちらも必死の攻防だった。

硝子越しで熱斗とメイルは見ていた。

「翔理大丈夫かな？」

メイルが心配そうに言つと、熱斗がメイルの肩に手を乗せて、

「大丈夫だよ！」

「なんで？」

「俺達の息子だから」

「熱斗… そうだよね！」

二人はキスをした。

-数時間後-

「テストの結果を言う、何も悪い事は無かつたが、お前達の必殺技を禁止する！」

「「なんで？」」

驚いたように言つと、

「お前達の必殺技は仲間にも危害が及ぶ。わかったか！」

「「ハイ！」」

そつして解散した。

この後みんなは帰つてすぐに寝た。

ツバメ

-数日後-

ルーシはキーボードを打っていた。

「よし、出来たぞー・シャドウ、融通があるぞー。」

「はつー。」

するとシャドウは機械の中に入った。

すると機械の姿が変わりアンドロメダとラ・ムが合体した姿だった。

「ついに出来た…電波テクノロジー壊滅装置…ダーク・ネビュラ・シャドウ!」

ルーシはスイッチを押した。

しかし何も動かない。

「やはりシノビのオーパーツが必要か…いや待て、データさえあつたらいけるか…」

するとルーシはカプセルを取った。

カプセルには赤い字でアクアと書いていた。

ルーシは開けると、体全体が水のウェイザードが現れた。

『バトルやるのー！やつたー！私超嬉しいー！早く指令ー！』

女らしきウェイザードが言った。

「シノビのオーパーツのデータをとつてこーーその前にロックマンを殺せー！」

するとアクアは笑つて

『了解』

アクアは消えた。

-スバルの部屋 -

ミソラは仕事でいなかつた。すると暁からメールが届いた。

「シノビのオーパーツを見つけた。場所はアメロッパ。行こー！」

そしてスバルはアメロッパに向かつた。

- アメロッパ -

湖の底にはアクアがいた。

アクアはシノビのオーパーツのデータをレーザーでとつていた。

『データ読み取り完了!』

するとアクアはロックマンの電波を感知した。

『来た来たロックマン! まずは小手調べ。』

アクアは上に光を発射した。

『さて楽しみ!』

アクアは楽しそうに笑った。

- ウェーブロード -

ロックマンはウォーロックの指示通りオーパーツの所へ向かっていた。

『おいスバル！後ろからあいつが来たぞ！』

ロックマンは振り向くと、ハープ・ノートがいた。

「ハープ・ノート！なんで来たの！」

「私はスバルをサポートするって言つたでしょ！」

「ミソラ… ありがとう…」

ロックマンはハープ・ノートの頭を撫でた。

そして再び走り出した。

するとハープが

『空から何か来るわよ！』

二人は上を見ると、黒い物体が降つて來た。

『ロックマン… 抹殺！』

すると黒い物体は一人を襲つた。

ロックマンは避けたが、ハープ・ノートはくらつた。

「きやあ————！」

「ハープ・ノート！」

ロックマンは叫ぶが、黒い物体はハープ・ノートの攻撃を止めない。

「許さない…絶対守るー。」

「よく言つたスバル！」

「！」の声はサイクロン！』

「ああ、お前に力を与えよう。闇の力を手に入れたからな。」

「ありがとうーよし行くよー！ダークエンジー・ウイング・サイクロンー！」

するとロックマンは光に包まれ、エメラルドグリーンの体になった。

「きれい…」

ハープ・ノートが言つた通り、確かにきれいだった。

『姿を変えても無駄だ！』

黒い物体はハープ・ノートへの攻撃を止め、ロックマンに攻撃した。

「ウイングシールド」

ロックマンの前に強い風が吹き、黒い物体の攻撃を打ち消した。

『何！』

「ウインドスラッシュヤー！」

ロックマンの腕が風で出来た剣に変わった。

そして黒い物体を切り刻んだ。

『まだ……だ！』

黒い物体は最後の攻撃を放ち、ロックマンに当たった。

『ばか……め……』

そう言つと黒い物体は消えた。

ロックマンは攻撃を受け、吹っ飛んだ。

「うわあ――――！」

するとハープ・ノートが泣きながら、駆けよつた。

「大丈夫！嫌だよ！死なないで。サポートするんだがら。」

『なら光の力を使いなさい。』

ハープ・ノートの頭の中に響いた。

「あなたはセレナード！」

『あなたの力は人を慰める能力があるのです。』

するとハープ・ノートの体が光に包まれ、白い体になった。

「ライトニング、エンジエルハープ・ノート。」

そつとロックマンの方を見て、

「今治すよ。ライトソング！」

ハープ・ノートが小声で歌うと、ロックマンは起きた。

「ハープ・ノート…ありがとうございます。」

ロックマンはハープ・ノートに抱きついた。

「ロックマン…」

しばらくして離すと、ロックマンが

「行くよ。」

「うそー。」

そう言つと一人は湖に向かつた。

- 湖の底 -

『来たわねロックマン!』

アクアは不敵な笑みを浮かべていた。

つづく

- 湖の底 -

ロックマンとハープ・ノートはシノビのオーパーツを探していた。

「あつ！ ロックマンあれ！」

ハープ・ノートが指したのはシノビのオーパーツだった。

「あれだ！」

二人は取りに行こうとすると、

『来たわねロックマン！』

上から声がした。

「「誰だ」」

『私の名はアクア、ルーシ様の指示でロックマンのデーターとシノビのデータを取りに来た。』

アクアの言った事に驚いた二人。

「何故持つて行かない！」

するとアクアは笑つて

『『だつて電波テクノロジー破壊装置にデータさえあればそれでいいもん。』』

「『電波テクノロジー破壊装置?』」

二人は首を傾げた。

するとアクアが

『『どうせ死ぬから教えてあげる。ルーシ様は電波テクノロジー破壊装置、ダーク・ネビュラ・シャドウを使って電波テクノロジーを破壊しようとしている。』』

一人は驚いた。

するとロックマンは

「なら僕達はお前を倒して阻止する!」

そう言つと攻撃した。

『『無駄よ!』』

アクアは防御した。

「バブルフック、キヤノン×3ギャラクシーアドバンス、レーザー

ミサイル+マヒプラス!』

レーザー=ミサイルは当たらなかつたが、後の全ては当たつた。  
しかしアクアはダメージをくらつていない。

「何!」

『今度はこっちから行くよ! アクアタワー、バブルハリケーン!』

ロックマンはアクアタワーは避けたが、バブルハリケーンは当たつた。

すると

「サンダーショックノート!』

ハープ・ノートが攻撃したが当たらなかつた。

「くそ! ダークエンジーワインド・サイクロン!』

ロックマンは変身した。

「ウインドスラッシュヤー!』

アクアを切るが、アクアは笑っていた。

『バブルスター。』

アクアは泡のバスターを発射した。

「うわ――――」

ロックマンは全て当たり、遠くへ飛ばされた。

するとアクアはハープ・ノートを見て、

『次はあなたよ!』

やつぱりアクアはハープ・ノートを攻撃した。

「あや――――!」

飛ばされたロックマンは、体が動け無かつた。

ロックマンはハープ・ノートが攻撃されているのを見てゐしか無かつた。

「ぐそ! これじゃあハープ・ノートを守れ無い。」

ロックマンは地面を叩いた。

するとロックマンは意識が薄くなり、田を開くと、白い空間だった。

するとフォルテが現れた。

『つたく、何やつてんだよ！大切な人を守るんだろー。』

「でも僕にはその力が無い。」

悔しそうに言つと、

『じゃあなんで大切な人を守るんだ。』

「えつー！」

驚くロックマンにフォルテは呆れて言った。

『絆つてのは相手をどう思つてるかって事だ。』

「そりだつたのか…」

驚いたロックマン。しかしその後笑いながら、

「僕が大切な人を守る理由は、大切な人が好きだからだ。」

『よし、これで揃つた。お前に真の力をやろう。』

すると現実に戻つた。

「凄い！力が湧いてくる！」

『ああ、これならアクアに勝てるぞ！』

ウォーロックは嬉しそうに言つとスバルは立ち、

「行くよー！ダークファイナライズ！ロックマン・ダークフルテブ  
レイク！」

するとロックマンは黒い光に包まれた。

ロックマンの体は黒く、茶色の古そなマントがあり、目が赤くなつていた。

そしてロックマンはハープ・ノートの所へ向かつた。

「待つてねハープ・ノート。それより体が変だな。」

ロックマンの言つ通り、体が変なことは後に最悪な事態を起こした。

くづく

真の力解放 - 閣 - (後書き)

昨日更新出来なくてすいませんー今日は後一話ほど更新します。感  
想待ってます!

## 暴走

ハープ・ノートはアクアの攻撃を受け続け、死にそうになっていた。

『これで最後よ！』

「（助けてロックマン！）」

ハープ・ノートがそう思い、目を閉じた。

ドーン

爆発音がなった。

「死ん…でない？」

ハープ・ノートは目を開くと、浮いていた。

ハープ・ノートはロックマンに抱き抱えて浮いていた。

「ロックマン！」

「今助けに来たよ！」

するとハープ・ノートは不思議そつ

「その姿は？」

「SSPGMが真の力をくれたんだ。」

するとハープ・ノートが泣いた。

「私怖かった……」

するとロックマンは優しく微笑み、

「大丈夫だよハープ・ノート。」

そしてロックマンの顔が真剣になり、

「アクア！お前は許さない！」

そう言ってハープ・ノートを降ろし、アクアの方向へ歩いた。

『また姿を変えても無駄よ！』

アクアは攻撃したが、ロックマンの周りにオーラが現れ、消した。

「ダークバスター。」

紫のバスターを発射すると、凄い速さでアクアに当たった。

『うわっ！』

アクアは吹っ飛んだ。

『ばかな…バスターで…これほどのダメージ…ふざけるな…強いのは私だ！』

怒ったアクアはロックマンにバブルバスターを連射した。

しかしロックマンはオーラに包まれ、ダメージをくらわない。

「これで決める、ダークファイナルブレイクDFB・ダークシャドウバスター！」

ロックマンのバスターに闇の力が集まり、巨大な紫の光線を発射した。

『こんな物！』

アクアは避けようとするが、

「サンダーショックノート！」

ハープ・ノートの雷属性の攻撃をくらい、麻痺した。

『ぐそ――――！』

アクアはロックマンの攻撃を受け、消えた。

「ロックマン！大丈夫？」  
ハープ・ノートが心配そうに言つと、

「大丈夫だ…うつ！」

突然ロックマンが苦しみだした。

「大丈夫かスバル、ミソラ！」

「大丈夫か！」

「大丈夫父さん、母さん？」

「大丈夫？スバル君、ミソラちゃん！」

「大丈夫かスバル、ミソラちゃん！」

「大丈夫スバル君、ミソラちゃん！」

「大丈夫ですか？」

アシッドエース、ジャック、メテオ、ジエミー、エグゼ、ロール、  
エメラルドの順で聞いた。

「それが、突然苦しみだして。」

ハープ・ノートは慌てて説明した。

あとロックマンが

「みんな……逃げて……早く……」

と言ひ出した。

「嫌！置いていけない！」 「駄目だ…早く…うわあ————」

ロックマンが叫ぶと、黒いオーラに包まれた。

「ロックマン」

「魔界の魔女」

暁が言うが、ハープ・ノートは遅れ、

卷之三

ロックマンの攻撃をへりつた。

「ロックマン！元に戻つてよ！」

そう叫んだハープ・ノートだった。



真の力解放・光・

暁達はロックマンを囲んだ。

「よし、今からロックマンを元に戻すぞ！」

一斉に攻撃した。

しかし闇の力を使っているロックマンが優勢だった。

するとエグゼが

「田を覚ませスバル！」

メガキヤノンを発射した。

しかしオーラに消され、

「ダークバスター！」

ロックマンの攻撃を受け、吹っ飛んだ。

「熱斗！」

ロールがエグゼを助けようとすると、

「ダークバルカン！」

ロールも攻撃を受けた。

するとメテオをとエメラルドが、

「みんな離れて！」

「早く！」

二人の言う通り、離れた。

「ソウルユニゾン！ フォルテソウル！」

エメラルドが変身し、メテオが、

「ΖＦＢシュー・ティングメテオ！」

隕石の攻撃をするが、効かなかつた。

「まだだ！シャドウレー・ザー！」

エメラルドが放つが効かず、

「ダーカスラッシャー！」

メテオとエメラルドは切られた。

そんな姿を見たハープ・ノートは泣いていた。

「早く戻つてよ……」んなロックマン好きじゃない！いつものロックマンの方が好きー！」

するとハープ・ノートは意識が薄くなり、目を開くと白い空間だつた。

するとセレナードが現れ、

『あなたは絆と決意が揃いました。』

「えつ、絆はなんにも考えてないよ。」

驚くハープ・ノートに優しくセレナードが

『絆はあなたの大切な人をどう思つているかです。だから揃つたのです。』

「そりなんだ。』

納得したハープ・ノート。

『ではあなたに光の真の力を『えましょ』。この力を使つと闇に勝てます。』

「わかりました!』

ハープ・ノートが元気よく返事すると、セレナードは笑い、

『がんばって下さい。』

と応援した。

ハープ・ノートは現実に戻った。

「ロックマン、元に戻つてね。ライトファイナライズ！ハープ・ライトエンジェルセレナード！」

するとハープ・ノートは金色の光に包まれた。

体が白色で、腕や足は金色だった。銀色の翼があり、ハープ・ノートの周りを金色の輪が二つ回っていた。

「ついに変身したか…」

暁が待つていたように言った。

ハープ・ノートが

「サークルレーザー！」

二つの輪からレーザーが発射された。

ロックマンはオーラを出したが、

「ヒンジェルシャイン」

翼から光を出した。するとオーラが蒸発して消え、レーザーが当たつた。

「今だ！」

暁が叫ぶと、みんな攻撃した。

当然オーラが消えたロックマンはくらつた。

「これで決めるよー！」

ハープ・ノートが言つて、手と一つの輪に金色の光が集まつた。

「ライトフォースブレイク  
LFBライトシャイニングレーザー！」

ハープ・ノートが光を発射した。

「うわあ————！」

ロックマンの変身は解け、普通のロックマンに戻つた。

そして倒れた。

「ロックマン！」

ハープ・ノートは駆けよった。

「安心しろただの気絶だ。」

暁の言葉に安心したハープ・ノートだった。

-数分後-

「うーん…」

ロックマンは目が覚めた。

「ロックマン！大丈夫？」

「ハープ・ノート…その姿は？」

「光の真の力よ。それより心配したんだから…」

そう言いハープ・ノートは泣きながらロックマンに抱きついた。

「は…離してよハーブ・ノート…」

ロックマンは真っ赤になった。

「ラブラブ中失礼だがWAXAに来てくれ。」

「暁さん！」

そうしてみんなはWAXAに向かった。

真の力解放・光・（後書き）

感想待つてます！

- WAXA -

「まずこれを見てほしい。」

暁が言ひと、画面に一体のウイザードが現れた。

「「セレナーデとフォルテ！！」」

スバルとミソラが言つた。

するとヨイリーが入つて來た。

「実はスバルちゃんとミソラちゃんの変身の関係について話すわ。」

暁とヨイリー以外首を傾げた。

すると暁が

「まずロックマンの変身はダークフォルテブレイクだ。」

そしてフォルテが説明した。

『「」の変身は強力なノイズある物で出来る。そのある物とは…』

セレナードが言った。

『憎悪です。恐らくその憎悪の影響で暴走したのでしょうか。』

セレナードは深刻そうに言った。

するとヨイローが沈黙を破り言った。

「そしてハープ・ノート、ハープ・ライトエンジェルセレナードよ。」

そしてセレナードは説明した。

『ライトエンジェルセレナードは憎悪と反対に慈悲で変身出来るの。だから闇に勝てた。』

するとフォルテが真剣な顔で言った。

『今から警笛する。ロックマン、ハープ・ノートがない時はダークファイナライズするなー!』

この言葉に全員驚いた。

「なんで?」

スバルが聞くと、セレナードが答えた。

『もしハープ・ノートがない時に変身すると必ず暴走するわ。だから光が無いといけないの。』

さらにフォルテが、

『ハープ・ノートがない時に変身出来るのは後3回だ…。』

しばらく沈黙が続いたが、スバルが

「わかりました！」

返事をした。

そして二体は消えた。

するとツカサが、

「だったら僕とジャックはファイナライズ出来るように修行するよ！」

するとジャックも

「ああ、今日中に出来るようになりますぜー。」

「ツカサ君…ジャック…ありがとうございますー。」

スバルは笑つて言った。

「さあツカサとジャック以外家に帰れ。二人はここで修行する。」

そして家に帰つた。

つづく

## ■告白（後書き）

次回は家での話です。最近熱斗、メイル、ベガ、翔理、ライトの出番少ないですね。後シノビはちゃんと回収しました。感想待ってます！

## 心配

-スバルの部屋 -

スバルの部屋には久しぶりにみんなが集まっていた。

「スバル、俺も力になれるように修行するよ!」

「熱斗だけじゃ無いよ。私や翔理、ベガも力になれるように頑張るわ!」

熱斗とメイルの言葉に安心したのか、

「ありがとう二人とも。これからウイルス狩りしよ!」

スバルが提案した。

みんなは了解した。するとミソラが、

「スバル、ちょっと話があるの。みんなは先に行つて。」

スバルとミソラ以外部屋を出た。

一人きりになった。

「スバル…」

「な…何ミソラ?」

「人きりなので少し緊張するスバル。

「あのね、変身の事なんだけど。」

「うん、ハープ・ノートがいない時は僕が変身したら駄目なんですよ。」

スバルが言つとミソラはつなずいた。

「実はみんながいない時ヨイリー博士と暁さんとセレナードに言われたの。」

-回想-

「実はミソラに言いたい事がある。」

するとセレナードが言つた。

「実はハープ・ノートがない時に闇の変身を3回するとロックマンは死んでしまいます…」

ミソラは驚いた。

「嘘でしょう…」

するとヨイリーが

「本当よ…変身した時からスバルちゃんの体が鶴まれてるわ…」

しかしフォルテが救いの一言を言った。

『しかしお前が本当に大切だと今までより強く思つと完全になる。』

この言葉に安心した。

「わかった！でも難しいな…」

すると優しくセレナードが、

『純粋に思えばいいんです。』

「はい…」

-回想終了-

するとスバルが、

「ありがとうミソラ、心配してくれて。」

そう言って抱きしめた。

「私はいつまでもスバルの傍にいるよ」

そつまつとさらに強く抱きしめた。

この後一人はウイルス狩りに行き、合計10万体デリートしたらいい。

つづく

## 心配（後書き）

次回は番外編でツカサとジャックの修行を書こうと思います。感想  
待っています！

- 番外編 - ツカサとジャックの修行

- WAXA訓練第二室 -

「よし、まぢュミーからだ。」

「ハイ！」

『おつー。』

暁に言われツカサとジュミーはつなぎいた。

「まぢッカサは決意があるか？」

暁が聞くと、

「はい。」

と返事し、顔を真剣にして、

「僕とジュミーがした罪を償い一生抱える。」

すると暁が

「いいだろう、ヒカル、絆は？」

ヒカルはウィザードONにして言った。

『俺達は友達だ。ただの友達じゃない。お互に一生助け合う友達だ。』

するとツカサとヒカルは意識が薄くなり、目を開くと白い空間だった。

「「」はどういヒカル？」

『わからねえ。』

ツカサとヒカルが話し合っていると、目の前にウィザードが現れた。

「『誰？』」

二人は聞くと、

『小生の名はエレキ、今日は貴殿にファイナライズの力を与えます。

』

エレキはそれだけ言い、消えた。

一人は現実に戻った。

「どうやらファイナライズの力を手に入れたようだな。」

暁が言った。

「なんでわかつたんですか？」

不思議そうに聞くと、

「究極の変身をするとセンサーが反応するんだよ。」

ツカサは納得した。

「よし、今度はジャックだ。決意は？」

暁が聞くと、

「うーん…世界の人々を守りたい！だな。」

するとクインティアが、

「もつとまともな決意はないのかしら。」

呆れたように言ったので、

「仕方ねえだろー」れしかねえんだからー。」

喧嘩しそうになつたので、

「まあまあ落ち着け。絆は？」

聞くと

「んなもんこりあるあるよー。」

あっけなく言った。暁とクインティアはため息をした。

しかしジャックの意識が薄くなり、目を開くと白い空間だった。

するとウイザードが現れた。

「誰だお前？」

ジャックが聞くと、ウイザードが答えた。

『俺の名はフューリックス、お前氣に入つたぜー。』

明るく聞くと、ジャックが、

「なんで？」

鬱陶しそうに言った。

するとさうに明るく、

『その性格だ。それよりファイナライズの力をやるよー。』

「サンキューー！」

ジャックが言うと消えた。

そして現実に戻った。

暁とクインティアは畠然としていた。

すると暁は我にかえり続けた。

「二人ともファイナライズ出来るから一人でファイナライズしてバトルしろー。」

そして暁とクインティアは部屋を出た。

「じゃあいぐよー。」

「ああー。」

一人はすでに電波変換していた。

「まずは僕から。いくよー・ヒカル！」

『いいぞー。』

そしてジヒミーは叫んだ。

「Hレキファ イナライズ・ジヒミー・Hレキブレイクー。」

するヒジヒミーが雷に包まれた。

ジヒミーが一人になつていて、腕が黒と白になつていた。

そして常に四つの稻妻がジヒミーの周りにあった。

「じゃあ俺もするぜ！ フュニックスファ イナライズ・ジャック・フレイムフェニックスブレイクー。」

ジャックは紫の炎に包まれた。

炎が消えた。

体が赤くなつていて、翼が少し大きくなり、炎のオーラに包まれていた。

「始めろ！」

スピーカーから暁の声が聞こえると同時に一人は激しくぶつかった。

「エレキバルカン！」

「甘い！フレイムオーラ、ファイヤービースト！」

ジェミニの雷のバルカンをジャックはオーラで防ぎ、炎をまとった爪で引き裂いた。

「ぐはつ！」

ジェミニはくらつたが、

「サンダーリカバリー！」

四つの稻妻がジョンニーに直撃した。

しかしジョンニーの傷は治っていた。

「なに！」

驚くジャック。するとジョンニーが、

「お返しだ！エレキバルカン、稻妻落とし、サンダースラッシュ！」

雷のバルカンを撃ち、四つの稻妻をジャックに落とし、さらに雷をまとった剣で切った。

「ぐはっーぐつー」

さすがにこの攻撃を受け、力があまり残っていなかつた。

しかしジョンニーも攻撃している時に攻撃され、あまり力が残っていなかつた。

すると二人は立ち上がり、

「「「」」れで決める！—！」

ジユリィーは四つの稲妻を手に集め、さらに他の電気を集めていた。

「エレキフォースブレイク  
EFB、サンダーチャージボルトブレイク！」

雷を一気に発射した。

「ならここも！」

ジャックはそう言い、両手に紫の炎を集め、

「エニックスブレイク  
EFB、ファイヤフェニックスブレイク！」

炎を次々発射した。

両方の必殺技が衝突した。

「つお——！」

「は――！」

やがて爆発した。

二人とも倒れていた。

- 数十分後 -

二人は所々包帯を巻いていた。

「二人とも凄かつた！以上解散！」

こうして修行が終わつた。

つづく

-番外編- ツカサヒジャックの修行（後書き）

意外と長い。感想待つてます！

**判明**

-リビング -

テーブルにはスバル達が座つていて、向かいに大吾が座っていた。

「まず伝えたい事がある。」

その言葉にスバル達は黙つた。

大吾が言った。

「新生・WWWの基地が判明した。」

この言葉に驚いた。

しかし大吾は続けた。

「そして基地に乗り込もうと思つ。詳しい事は明日WAXAで話すから来てくれ。」

するとスバルが質問した。

「どうしてわかったの？」

「実はライトが教えてくれた。どうやって知った分からない。」

スバル達は疑問に思った。

しかし余計な詮索はしないでおこうと思つたスバル達。

そして部屋に戻つた。

つづく

**判明（後書き）**

短くてすいません！最近更新が深夜が多いです。明日更新できるか分からぬので後一話更新します。感想待ってます！

## 衝撃

- WAXA 司令室 -

画面の前にライトがいて、その向かいにライトを除く遊撃隊のメンバーが立っていた。

雰囲気は重苦しいものだった。

するとライトが喋った。

「今日はみんなに黙っていた事を話すわ……」

みんなの顔が真剣になった。

「実は私は新生・WWWの元幹部だったの。」

この言葉にみんなは衝撃を受けた。

しかしライトは続けた。

「私はルーシからフォルテをもらい、電波変換できるようになったの。そして色々な悪事を働くように命令された。」

ライトは顔をうつむいていた。

「でも私とフォルテはしたくなかった。なぜなら人の笑顔が好きだつたから。」

この時みんなは辛かつたんだと思つた。

「だから私は組織を抜けて新生・WWWを潰そうと思つた。」

そしてライトの話は終わつた。

みんなは驚きの表情が隠せなかつた。

するとスバルが言つた。

「でもライトは間違つていない。それで正しかつたと想つよ、ライト。」

そして剣太が、

「アリだゼーだから」ソーハーで楽しく生活できる。」

セーラン・ハーフィーが

「私達はライターちゃんとブロガーなんだから。協力するよ。」

「雪葉ヒライトは嬉しくて泣いていた。

「みんな……ありがとう。」

そしてライターは泣き止み、話した。

「今から新生・WWWの基地を言つわ。」

みんなは再び黙った。

「場所は富士山の樹海よ。すでに詳しい場所は判明してるわ。」

みんなは驚いた。しかしライターはセーラン衝撃の言葉を言った。

「後、新生・WWWはスバルのダークファイナライズでしか倒せない捨て駒の電波体を二体いるわ。」

「そんな！僕は最高で二回しか出来ないよ！まだ電波テクノロジー破壊装置も壊さないといけないんだよ…三回したら僕は死ぬんだよ！」

ミソラ以外最後の言葉に驚いた。

「スバル君…嘘でしょ。」

「どう言つだよスバル！」

ツカサヒジャックが聞いて来た。

「事実だ。スバルは後三回したら確実に死ぬ。」

暁とヨイリーが入つて來た。

暁まで言つたので黙るしかなかつた。

するとスバルが聞いた。

「暁さん、何の用ですか？」

「今からハンターV Gをバージョンアップする。まずスバルからだ。」

「

そう言つてみんなはハンターV Gをヨイリーに渡した。

「一時間程度で終わるわ。」

そう言つてヨイリーは部屋を出た。

「一時間後

「スバル！ 終わったぞ！」

暁に呼び出され、スバルはハンターV Gを返してもらつた。

ブーー！ブーー！

突然サイレンが鳴った。

するとアナウンスが流れた。

『スピカモールにて電波体が一体暴走したもよう、新生・WWWの  
電波体と思われます。』

アナウンスが終わると、スバルは現場へ行こうとした。すると暁に

「まで！スバルは行くな！俺が行く！」

しかしスバルは

「いや、僕が行きます！」

抗議した。暁はスバルの真剣な目を見てやれやれと言い、

「わかった、行つてこい！ただし無理するなー体が変だったらすぐ  
に逃げろ！」

そしてスバルは

「ハイ！」

そう言いスピカモールへ向かった。

つづく

## 消えた流星（前書き）

昨日更新出来なくてすいませんー。塾があり忙しくて。それでは本編をどうぞ！

## 消えた流星

-スピカモール -

ロックマンは到着した。

「どうしている!」

ロックマンは叫んだ。

『俺はここだ!』

上から声がした。そして電波体が降りてきた。

地面上に着いたと同時に電波体は剣で攻撃してきた。

「スーパー・バリア、ブライソード!」

ロックマンはスーパー・バリアで防御し、ブライソードで応戦した。

『.....』

電波体は黙りながら闘っていた。

- 数十分後 -

続いていたが、ロックマンはだんだんと押されてきた。

「仕方ない、ダークファイナライズ！」

ロックマンはダークフォルテブレイクに変身して、闘つた。

- その頃WAXA司令室 -

『シドウ、ロックマンがダークファイナライズしました。』

アシッドが言った。

暁は焦つて來た。

「まだか…」

するとヨイリーが入つて来て、

「みんな、出来たわ！」

ハンターV Gをそれぞれに渡した。

そしてみんなは電波変換してスピカモールへ向かった。

-スピカモール -

今度は逆にロックマンが焦りが見えていた。

しかしロックマンは焦りが見えて來た。

「やばい…体が変だ…」

『スバル！これで決めるぞ！』

ウォーロックが言い、ロックマンは必殺技を放とづいた。

「DFB-!ダークシャドウソード！」

紫に光ったソードで電波体を切った。

「やった！」

誰もが勝利を確信した。

しかし電波体はかすかに残っていた。

「ぐつー！レーザーナイフ！」

ナイフを投げると同時に電波体は消えた。

「うー！」

油断していたロックマンはへらった。

ナイフが刺さった場所は心臓だった。

「　　「　　「　　「　　「　　「スバル（君）……」「　　」「　　」「　　」「　　」「

みんなが来たと同時にロックマンは口から血を吐いて倒れた。

「スバル！」

ハープ・ノートがロックマンに駆けよった。

「スバル！死なないで！」

しかしロックマンの顔はどんどん生氣を失っていく。

一同は泣く者や顔を俯かせる者もいた。

するとハンターVGが鳴つた。

『新生・WWWの電波体にWAXA が襲撃されています…直ちに

来て下さい。』

しばらく沈黙が続いたが、アシッドエースが言った。

「みんな行くぞ！ 救急隊は呼んでいる。」

しかし、

「私は残ります！」

ハーブ・ノートが言った。

すると暁が、

「わかった、許す。だが十分までだ。」

と言い、ハーブ・ノートはうなぎいた。

そしてハーブ・ノート以外はWAXAへ向かった。

「早く田を覚まして！」

ハーブ・ノートは祈るしかなかつた。

つづく

**消えた流星（後書き）**

ロックマンが死にました。ロックマンファンの皆さんすいません！  
でも次回なんと……

感想待つてます！

スバルは目を開けた。

そこは真っ白の空間だった。

「僕はどうなったんだっけ。」

するとウォーロックが答えた。

『俺達は電波体の攻撃を受けて死んだんだ。』

「そつか…」

スバルは悲しくなった。

『きっとミソラは悲しんでるぜ。』

ウォーロックの言葉に少し考えが浮かんだ。

「そりいえばミソラが言つてた完全に闇の力を自分の物にする方法覚えてる?」

スバルはウォーロックに質問した。

『ああ、ミソラがスバルの事をより大切だつて思うんだろ。』

名前を出されたので、スバルは少し赤くなつてうなずいた。

「それで思つたんだけど大切だと思つのはミソラだけじゃなくて、僕もミソラの事を大切だと思わないといけないと思うんだ。」

スバルの発言にウォーロックは、

『確かに……だつたら今強く思つたらいいじゃねえか。』

「やうするよ。」

ウォーロックの提案にスバルは実行した。

「（僕はミソラが好きだ……宇宙で一番好きだ……）」

するとフォルテとセレナードが現れた。

『よく気付いたな。』

『あなたの言つ通りです。』

そしてセレナードは言った。

『これで何回もダークファイナライズ出来ます。』

スバルは安心するがフォルテが厳しい事を言った。

『ただし、暴走は起きる。』

『『へー。』』

思わず一人は変な声を出した。

そしてウォーロックが

『なんでだよー。』

完全に切れた口調で怒鳴った。

『仕方ないんだ。』

フォルテが残念そうに言った。

セレナードが続きを言った。

『暴走しないよつこするには、闇とほどつやつ事なのかを知らなければいけません。』

スバルは少し考えた。

しかしスバルはある事を思い出した。

「そんな事より僕は死んでるよ。」

するとフォルテが言った。

『それは安心しろ、生き返りたいと強く思え。』

そう言つとフォルテとセレナードは消えた。

「よし、僕は生き返りたい！」

するとスバルは意識が薄れた。

-スピカモール -

ハープ・ノートはロックマンをずっと見守っていた。

『ミソラ…もう十分よ…。』

ハープが言った。

そしてハープ・ノートは立ち上がり、背を向けた。

「バイバイスバル…。」

ハープ・ノートが立ち去ろうとした時、

ハープ・ノートは振り返った。

「ミソラ…」

「ただいまミソラ！」

そこにはハープ・ノートが一番会いたかった人が立っていた。

「そう、ロックマン」とスバルだった。

「スバル！」

二人は電波変換を解き、ミソラはスバルに抱きついた。

「スバルのバカ！心配したじやない！」

ミソラはスバルの胸で泣いていた。

スバルはミソラの頭を撫でて優しく抱きしめた。

「心配かけてごめんねミソラ……。」

しばらくそのまましていた。

「さあ行くよミソラ！」

「うん！」

そうして一人は電波変換してWAXAへ向かつた。

つづく

助けに来た

- WAXA -

「ロックオンソード！」

『無駄だ！』

「ロケットナックル！」

『エレキソード。』

『効かん！』

アシッドエースとジンギーの攻撃を軽々かわした。

その電波体は赤いキグナスだった。

「くそ！メガキャノン！」

エグゼが放つが、キグナスが回転して防ぎ、

『フェザーバルカン！』

「うわあ―――！」

逆にエグゼがくらつた。

「熱斗！」

ロールがエグゼに駆けよつた。

「フェザーショット！」

キグナスが羽を撃つて來た。

当然無防備のロールは攻撃をくらつ…はずだったが、

「ダークバルカン！」

紫のバルカンに打ち消された。

「IJの声は……」

「まさか……」

みんなが驚いていた。

すると一人の電波体が現れた。

「やあ、みんな！」

ロックマンとハープ・ノートだった。

喜びの雰囲気の中、

「喜ぶのはまだだ！」

暁が言った。

するとロックマンは攻撃した。

「ダーカスラッシュヤー！」

闇の剣で切った。

しかしロックマンは攻撃を止めない。

「ダークバルカン、シャドウレーザーミサイル、シャドウキャノン、  
ダークバスター！」

合計四つの攻撃を全て受け、弱っていた。

「これで最後だ！」

ロックマンはキグナスにバスターを向けた。

「ダークチャージショット！」

そしてキグナスは消え去った。

するとみんなは電波変換を解いた。

そしてWAXAへ入った。

つづく

## 重大なお知らせ

皆さんこいつもこの小説を読んで下さりありがとうございました！

さて、今日は皆さんに重要なお知らせをします。

この、流星のロックマン4・絆・の続編を執筆します。（絶対に）

タイトルは…

流星のロックマン・スクールライフ・

です。

この小説はスバルとミンラの恋愛がメインです。バトルも少しあります。

流星のロックマン・スクールライフ・は流星のロックマン4・絆・が完結すると始まります。

期待して下さい。

そして、流星のロックマン4・絆・もクライマックス間近です。

果たしてスバル達は新生・WWWの野望を打ち碎く事はできるのでしょうか！

期待して下さい。



## 作戦発表

- WAXA 司令室 -

そこにはみんな集まっていた。

すると暁が入って来た。

みんなは話を止めた。

暁は画面の前で止まり、振り返った。

「今日はみんなに話がある。が、その前にスバル、ダークファイナライズは何回もして大丈夫か。」

「はい、でも暴走はするかもしないけど。」

この言葉に少し安心し、暁は続けた。

「明日、遊撃隊のメンバー全員基地に乗り込むぞ！」

これには全員驚いた。

「暁さん、明日ですか？」

「ああ、明日だ！」

スバルの質問に普通に答える暁。

「では作戦を言う！ライトによると防犯プログラムが三つあってそれを破壊しないと最深部にいけないらしい。そこで三つに分ける。」

そして三つのグループに分けられた。

チーム…スバル、ミソラ、熱斗、メイル

チーム…暁、クインティア、ジャック、ベガ

チーム…ツカサ、ライト、剣太、翔理

の三つのチームだ。

「今日は解散！明日に備えて休め！」

そう言ってみんなは解散した。

-基地 -

「これで起動できる… 起動する日は…

明日の正午だ！」

電波テクノロジー破壊まで刻一刻と迫っていた。

つい  
へ

## 作戦発表（後書き）

短かっ！最近塾が忙しくてしばらく更新が夜になります。感想待つ  
てます！

## ロックマンそれぞれの約束

-スバルの家 -

スバル達は茜に明日の事を伝えた。

「そう……でもあなた達が決めたなら文句は言わないわ。あなた達が無事でさえいればそれでいい。」

スバル達は少し安心した。

そしてベガと翔理はリビングでテレビを觀ると言つたのでベガと翔理以外それぞれ部屋に行つた。

-熱斗の部屋 -

熱斗とメイルは布団に隣同士で横になつていた。

「ねえ熱斗。」

「なんだメイル？」

メイルが不安そうに聞いた。

「明日墓地に行くけど、私達死なないよね。」

「当たり前だ！メイルやみんなの為に絶対死はない！」

熱斗は断言した。

「ほんとに死なないでね……私、熱斗が死んだら生きていけないよ……」

泣きながら言った。

すると熱斗はメイルを優しく抱きしめた。

「安心しろメイル、俺は絶対に死はない……約束するー。」

「熱斗……うん！約束だよー！」

メイルも抱き返した。

-スバルの部屋 -

時は同じく、スバルとミソラはベットに横になっていた。

「こよいよ明日か……なんか緊張するねミソラ……」

「うん……」

「ミソラ？」

明らかにミソラの様子がおかしかった。

スバルは聞いた。

「どうしたのミソラ？様子が変だよ。」

するとミソラは泣き出した。

「明日、もしかしたら私達死ぬかもしれない…私はスバルが死ぬのは嫌だよ…」

「ミソラ…」

「私もスバルが死んだら生きていけないよ…」

するとスバルはミソラを優しく抱きしめ、頭を撫でた。

「大丈夫…僕は何があつても死なない…だからミソラも死なないでね…」

そう言ってスバルはさらに強く抱きしめた。

「スバル…わかった、約束だよ…」

そう言って抱き返した。

「うしてそれは約束した。

何があつても死なないと…

ついで

## ロックマンそれぞれの約束（後書き）

次回は乗り込む準備の話です。感想待ってます！

## 準備

- 富士山樹海前 -

そこには遊撃隊のメンバーが集まっていた。

「ではさっそく基地に向かう。だがWAXAが準備できていないので十分間休憩する！」

「暁さん、何を準備するの？」

スバルが聞いた。

「ああ、最終兵器だ。」

「へ、へー。」

最終兵器といつ言葉に疑問を抱いたが、考えるのを止めた。

「スバル」

「ミソラ、どうしたの？」

ミソラはスバルのハンターを指して答えた。

「メールが来てるよ」

「あつ！ホントだ、ありがとう。」

そしてスバルはハンターを見た。

メールは委員長からだった。

「スバル君、今日基地に乗り込むんだって？なんで言わなかつたの！  
まあいいわ！でもこれだけは約束して…これは私とゴン太とキザマ  
口からもよ…」

絶対に生きて帰つてきなさい！

もし帰つて来なかつたらただじや済まらないわよ…

メールを読み終えてスバルは返信のメールを書いていた。

- 委員長、ゴン太、キザマロ、心配してくれてありがとうございます。

僕は必ず生きて帰る！

「ゴン太とキザマロに伝えておいて。 -

そして送信した。

「おーい、出発するぞー！全員電波変換して行くぞー！」

そしてそれぞれ電波変換していた。

「電波変換！」

スバルも電波変換した。

「よし、出発！」

全員歩き始めた。

「（僕は）の戦い勝つ！そしてみんなで帰るんだ！」

そう強く思うスバルだった。

つづくおはよう、ウォーロック

そして、着替えにいった。「やけにすんなり起きるな…」

そう思うウォーロックだった。

そして、スバルについて行くように階段を降りた。

スバルがイスに座ると、ウォーロックが聞いた。

『一体どうしゃがつたんだスバル？やけに嬉しそうだな  
今日は転校生が来るらしいよ！しかも3人だよ！』

スバルは嬉しそうに言つた。そして、

「行つて来ます！」

と言つて扉を開けた。すると、

「「「おはよひ（ゝ）やこます）、スバル（君）」」「おはよひみんな」

ルナ、キザマロ、ゴン太が挨拶した。

「さ、早く学校へ行つて転校生を迎える準備をするわよ！」

そつと言つてスバル達は学校へ行つた。

・ウエーブロード・

そこには、ギターを背負つた女の子の電波体がいた。

「久しぶりだねスバル君！ また会えてうれしいよ！ しかし驚くだろうなー スバル君 」

スバルを見ながら言つた。さらに、その子は学校へ行つた。

うる

## 準備（後書き）

次回は基地に乗り込んで チームの話です。 感想待つてます！

## プログラム破壊 -ペガサス-

- 基地 -

「 ジーが… 基地…」

スバルが驚くのも無理はない。

「 基地つて言つよつ要塞みたい。」

ミンラが言つた通り、基地と言つよつ要塞だ。

「 よし、 入るぞ…」

暁が言い、みんなは中に入った。

- 基地内 -

一本の長い廊下があり、その先には一つの扉があった。

そして扉の上には二つの機械があつた。

「 ではこれより作戦開始！」

そしてそれぞれチームごとに機械へサイバーインした。

- 左の機械の電腦 -

左の機械の電腦には チームが入っていた。

「さつさと終わらせようぜ!」

「コントロールパネルはあそこよ!」

「スピード上げるわよ!」

「ウイルスに気をつけろ!」

熱斗、メイル、ミソラ、スバルの順で言った。

四人は着いていた。

- 数分後 -

「よし、壊すよ！」

ロックマンがロックバスターを撃とうとした時、

『プログラムを破壊せん！』

声がした。

「ど二だ！」

『スバル！上だ！』

ウォーロックに言われ、四人は上を向いた。

すると上から電波体攻撃して来た。

「「バリア！」」

「「エリックスチール！」」

四人は避けた。

「お前は…ペガサス！」

そこには黒い体のペガサスがいた。

『フリー・ズショット！』

ペガサスは氷の塊を無数に放った。

「オーラ、エレキソード！」

ロックマンはオーラを張り、ペガサスの弱点の電気属性のソードで攻撃した。

『無駄だ！』

ペガサスは避けた。

「サンダーショックノート！」

ハープ・ノートの雷の音符がペガサスに当たった。

『こんな攻撃効かん！』

ペガサスは怯まなかつた。

「それはどうかな！メガキャノン！」

エグゼが放つ。

「アイスシールド、フリーズブレイカー！」

ペガサスは氷の盾で防ぎ、氷の光線を放つた。

「うわあ――――！」

エグゼはくらつた。

「リカバリースプレッド！」

ロールの回復する銃をエグゼに当て、エグゼは回復した。

「サンキュー、メイル！スバル行くぞ！エリアスチール、エレキソード！」

「うん！エレキソード！」

二人はペガサスに向かって切ろうとした。

『こんな物！』

ペガサスは避けようとするが、

「アイスステージ！」

「バブルフック！」

ロールとハープ・ノートの攻撃で、ペガサスは凍ってしまった。

「「ダブルロックマンソード！」」

二人のロックマンはクロスするようにペガサスを切った。

『ぐはつー。』

ペガサスはテリートされた。

「チャージショット」

ロックマンの攻撃でプログラムを破壊した。

「よし、戻りう。」

そうして一つのプログラムを破壊した。

つづく

プログラム破壊 -ペガサス -（後書き）

大晦日と元旦は更新出来ません！

それでは皆さん良いお年を！

# プログラム破壊 - ドラゴン -

# - 真ん中の幾戒の電凶 -

そこにはチームのアシッドエース、クイーン、ジャック、メテオ  
がいた。

「よし、行くぞ！」

卷之三

「あれ、クインティアどうした？」

クインティアは座っていた。

「足を挫いた。」

「何やつてんだよー!仕方ない、おぶつてもいいー。」

そう言いアシッドエースはクインティアをおぶつた。

「あ……ありがと……」

顔を赤くしながらも嬉しそうなクインティアだった。

-コントロールパネル -

四人は着いた。

「よし、壊すぜ！」

ジャックが壊そうとするが、前に緑の光が現れた。

『お前達にプログラムを破壊せん！』

それは黒い体のドラゴンだった。

「ならお前を倒すまでだ！」

アシッドエースは言い、攻撃した。

「ロックオンソード！」

そして後に続くように残りも攻撃した。

「ペインフレイム！」

「ファイヤーシューティングメテオ！」

「ハイドロラゴン！」

攻撃は全て的中した。

『ぐはっ！なかなかやるなーなら最強の技を見せてやるー！レメンタルサイクロン！』

ドラゴンは回転して葉っぱを巻き上げ、竜巻を起こし、四人の方へ向かった。

「ジャックとメテオは炎系の技を放て！俺とクインティアはその後に攻撃する！」

ジャックとメテオは竜巻の方を向き、技を放った。

「ペインフレイム！」

「ファイヤーシューティングメテオ！」

当然、無防備のドラゴンは当たった。

『ぐはっ…しかしこれぐらいでは死なん！』

竜巻は更に炎を巻き上げ、攻撃して来た。

「これでもくらえーハイドロドラゴン！」

クイーンは水の攻撃を放ち、ドラゴンは当たった。

『ぐつー。』

竜巻が消え、姿が現れた。

「これで最後だー！ ウィングブレーダー！」

アシッドエースは突進し、ドラゴンに当たった。

『くそ！』

ドラゴンはテリートされた。

アシッドエースはそのままコントロールパネルに当たり、プログラムを破壊した。

「よし、任務完了！ 戻るぞ！」

そして四人はサイバーアウトした。

つづく

## プログラム破壊・デリケン・（後書き）

明けましておめでたい状態であります！今年も僕の小説を宜しくお願いします！

## プログラム破壊 - レオ - そして新しいカップル

- 右の機械の電腦 -

そこには#チームのツカサ、ライト、剣太、翔理がいた。

『ツカサ！早くプログラム破壊しようぜ！』

「待つてヒカル！個人の行動は危険だよ！」

『大丈夫だつて！』

ヒカルが一人で行こうとすると、足下が凍った。

『なんだこれは！』

「言つ事を聞かないから。」

ライトはそう言い、ヒカルを無視して先へ行つた。

「ライトにあまり逆らわない事だな。」

剣太はそう言い、ライトの後を付いて行つた。

「ほら、ヒカル！ 僕達も行くよ！」

ツカサはヒカルを助けて、付いて行つた。

『俺なんか扱い酷いような？』

ヒカルも付いて行つた。

四人は着いた。

-コントロールパネル -

さつそくヒカルは破壊しようとすると、翔理が止めた。

「待つて下さいー！罷かもしれません。」

翔理はそう言い、コントロールパネルに向かつてキャノンを撃つた。

『アンガーファイア！』

火の玉に消され、姿を現した。

それは黒いレオだった。

『破壊せん！』

「ならあなたを倒す！」

ライトは氷の光線を放った。

レオは避けたが、

「「ヒレキソードー！」

剣太と翔理の攻撃により、レオは麻痺した。

『ぐつ！動けん！』

ライトはその隙を見逃さず、攻撃しようとした。

『かかつたな！アトミックブレイザーパーク！』

レオは炎の光線を放った。

「しまった！」

ライトは攻撃を受けそうになつた。しかし、前に一體の電波体が現れた。

『『ジヒリーサンダー！』』

アトミックブレイザーとジヒリーサンダーが衝突した。

「ライター早く逃げて！」

ツカサに言われ、少し驚いた。

「今呼び捨てで…」

「いいから逃げて！」

ライターは赤くなるが、すぐ口付きを変え、

「いや、私も戦うーマジックフリーーズショット！」

するとレオは凍った。

「今よー。」

「ありがとうライター！」

ジユミーは威力を強め、レオテリートした。

そしてプログラムを破壊した。

「みんなー先にサイバーアウトして、ライトと話があるんだ。」

そしてライト以外サイバーアウトした。

「で、話って何？」

赤くなりながらも、聞いたライト。

「実は君の事が好きなんだ。だからこんな僕だけ付けて下さ  
い。」

ライトは少し考え、顔を赤くして答えた。

「いやいやお願いします。」

するとツカサは笑顔になつて言った。

「ありがとう。」

そしてサイバーアウトした。

つづく

-廊下-

三つのチームはほぼ同時にサイバーアウトした。

「おっ、三チーム終わったみたいだな！」

みんなうなずいた。

するといつりが聞いた。

「クインティアさん何か顔赤いけど何かあつたんですか？」

「なつ、何もないわよー。うふうふばりやんも嬉しそうね。」

クインティアはとても動搖して、ライトの方へ話を逸らした。

『ツカサがライトにライトはじめて返事したんだよー。』

「「ヒカル！！」

ヒカルが言い、ツカラとライトは顔を赤くした。

「ツカラもやるな！じゃあ俺もクインティアに…」

「ゴンッ！」

クインティアは杖で殴つた。

「今は敵のアジトだし人前で変な事言わない！」

暁はクインティアに怒られ凹んだ。

「じゃあ今から乗り込むぞ…」

暁は凹んだまま扉を開け、入った。

皆も続いて入つた。

その頃奥の部屋ではルーシが作業していた。

「これで最終検査は終了。後は私が…………するだけだ。」

「こちらも着々と準備が進んでいた。

つづく

## 休憩（後書き）

今回は作者の都合上短くなりました。

今思つと五十話突破してゐんですね。

次回はついにルーシと対面します！果たしてルーシの眞の目的は？  
ご期待下さい。

ちなみにあとこの小説は残り十話あるかないかです。

長くなりましたが次回ご期待下さい。（しつこい。）

## 真の目的

- 奥の部屋 -

みんなはぞろぞろと部屋に入った。

「なんだこの部屋は……」

「氣色わるい！」

暁とジャックが言つ通り、部屋のあちこちに機械が置いていて、天井に向かって太い管が何本も繋がっていた。

「なあ暁、あれがもしかして電波テクノロジー破壊装置？」

皆が一斉に物体に注目した。

「その通り！それが私の最高傑作、ダーク・ネビュラ・シャドウだ  
！」

するとビダーク・ネビュラ・シャドウの目が光り、パイプが外れた。

『スバル、これはかなりやべえぞ…』

『ええ、かなり強力な電波よ…』

『それだけじゃねえ、こいつの中にたくさん電波体がいるぜツカサ…』

『しかもアンドロメダやラ・ム、アポロンとシリウスの反応もあります。』

ウイザード達は驚いていた。

「でもなんで電波テクノロジーを破壊するんだ！」

スバルが聞いた。

「何故だと！ふざけるな！原因はお前達人間だろ！」

「原因は人間だと！何故だ！それにお前も人間だろ！」

暁が叫んだ。するとルーシーは笑いながら言った。

「お前達人間がくだらん事をして何度も地球が危機にさらされただろ！だから私はダーク・ネビュラ・シャドウを使い地球をリセットする！」

皆は驚きを隠せなかつた。

ルーシーは続けた。

「それに私は電波体だ！」

これには特に驚いた。

「ま…まさかお前アレをするんじゃ…」

ルーシーはニンマリした。

「そつ…私とダーク・ネビュラ・シャドウとシンクロするー！」

暁以外分からなかつた。

「暁さん、シンクロつて？」

スバルが聞いた。すると暁は震えた声で言つた。

「シ……シンクロとは電波体同士で周波数を強制的に合わせ、融合する事だ……シンクロすると力は一倍になる。」

驚いているが、ウォーロックは平然として言つた。

『でも弱点はあるぜー。』

「えつ！」

ウォーロックは続けた。

『周波数を強制的に合わせると、それだけ体に負担がかかる。だからシンクロできるのはせいぜい五分だ。』

「なら五分だけ耐えたらいいんだね。」

皆は少し希望が見えた。

「お喋りは終わりだー！シンクロー！」

ルーシはシンクロした。

姿はあまり変わらないが、威圧感が増した。

「こちらも本氣で行くぞ！」

卷之二

「「「ファイナライズ！」」」

「ライトファイナライズ！」

「ダークファイナライズ！」

ダーク・ネビュラ・シャドウとサテラポリス、決戦の火蓋は落とされた。

つづく

## 真の目的（後書き）

どうでしたか？

さてみなさんにお知らせがあつます。

勝手ですが、次回の更新は2月1日になります。

1月は多くの用事が重なり、更新できても短い物になります。それではみなさんは満足しないと思つので、2月1日についつもより少し長くします！なので期待して下さー。

しばらく更新はありませんが、この小説を宜しくお願いします。

では2月1日にー。

図（前書き）

みなさん、久しぶりです。時間が空いたので短いですが投稿しました。ではどうぞ！

図

部屋の中では両者攻防が続いていた。

「ダークバルカン！」

「ライトH」「！」

「稻妻落とし！」

「フェニックスフェザー！」

「ウイングブレード！」

ファイナライズしているメンバーは攻撃を放つがダーク・ネビュラ・シャドウには当たるが全く効いていない。

その後も皆は攻撃を続けるが、効かなかつた。

『今度はこっちの番だ！』テリートレーザー！』

ダーク・ネビュラ・シャドウは何本もレーザーを放つた。

全員受けた。普通の電波体なら間違いなくテリートされていたが、かろうじて耐えた。

すると熱斗とエグゼが何かを確信した。

そして遊撃隊のメンバーに教えた。

「みんな！あれば多分ドリームオーラだ！あれば一定の攻撃力以上じゃないと効かない！」

これには皆驚いた。

『でも安心して！ドリームオーラは攻撃する瞬間消えるから…』

しかし沈黙は続いた。すると暁が喋った。

「つまり誰かが囮になれって事か…」

「私が囮になります。」

そう言つたのはライトだつた。

暁は止めようとしたが、ライトの口は真剣そのものだつた。

「わかつた、いいだろ？！」

そして遊撃隊は実行した。

つづく

図（後書き）

どうでした？明日も投稿します！

## 万事休す

遊撃隊は通信機で囮作戦を確認していた。

「いいか、あいつは後三分程でシンクロが消える。だからそれまで  
目一杯攻撃するんだ！」

遊撃隊はそれぞれ散つた。

「あなたの相手は私よ！」

ハデスが叫ぶと、案の定ダーク・ネビュラ・シャドウはハデスに攻  
撃した。

「今だ！」

ロックマンの掛け声で攻撃した。

すると当たった。

『なつ、何故だ！私の防御は計算上完璧なはずだ！』

自分がダメージを受けた事に驚くルーシ。それを更にロックマンは言い放つ。

「いくら計算してもそれが完璧だと限らない！何度も挑戦して絆の力で勝つんだ！」

すると突然ルーシは黙つた。

『絆だと…ふざけるなあ……………』

すると地面が揺れた。

『貴様ら全員抹殺してやる…』

ダーク・ネジユラ・シャドウは手にビームをチャージし始めた。

「全員退散！」

『ぐつーがあ……………』

突然、ダーク・ネビュラ・シャドウが苦しみ始めた。

体が光ると、二つに分かれた。

「なっ、シンクロが終わつた…。」

ルーシは震えていた。

そこにはかさずアッシュドエースはルーシを確保した。

『ギャア————！』

ダーク・ネビュラ・シャドウが奇妙な悲鳴をあげた。

ダーク・ネビュラ・シャドウの顔は赤くなっていた。

「ついにダーク・ネビュラ・シャドウが暴走した…これで誰にも止められな…い…」

ルーシは氣絶した。

ある日ダーク・ネビュラ・シャドウは腕を振った。

「つわつー」

遊撃隊は吹っ飛び、壁にぶつかった。

ロックマンとエグゼ以外電波変換が強制的に解かれた。

「ぐつーなんて強やだ…」

皆驚いていた。

なす術も無かつた。

つい

## 万事休す（後書き）

明日は更新出来ません。

明後日更新します。

感想待つてます！

## シンクロ

遊撃隊は壊滅寸前だつた。

ロックマンとエグゼ以外電波変換不可で体力も限界に近い。

そんな中スバルと熱斗は相談していた。そしてスバルは遊撃隊に言った。

「みんな……逃げてくれ……」こは僕と熱斗でシンクロする…」

しかしミンラとメイルは反対した。

「いや！私もスバルと戦う！」

「そりよ熱斗！私も戦う！」

しかしスバルと熱斗は首を横に振った。

「「ウツー！」」

スバルはミソラに、熱斗はメイルに腹を強く殴つた。

ミソラとメイルは氣絶した。

「「「めん…」

スバルと熱斗は謝り、暁とクインティアに預け、スバルと熱斗以外逃げた。

「いくよ熱斗！一人で帰るんだ！」

「ああ、一緒に帰ろう！」

一人はうなずいた。

「「シンクロ！」」

二人はシンクロし、合体した。

「ロックマン・ダブルブルーソウル！」

つづく

## シンクロ（後書き）

更新出来なくてすいません！明日は更新出来ません。  
感想待ってます！

## ネバーギブアップ

部屋はロックマン対ダーク・ネビュラ・シャドウの戦闘中だった。

状況はシンクロしたロックマンが優勢だった。

しかしロックマンは焦っていた。

「（まことに）後一分でシンクロが終わってしまう……よし、これで決めよう！」

するとロックマンはダーク・ネビュラ・シャドウの前に立った。

「行くぞー！ ダーク・ネビュラ・シャドウ！」

ダブルロックマン・ブルーソウルスラッシュ！

青い剣で切った。

それと同時に噴煙が上がった。

「「やつたか?」」

噴煙が収まつた。

「「なつ、何!...」「

ダーク・ネビュラ・シャドウはボロボロだが、からうじて残つてい  
た。

『デリートレーナー』

レーザーはロックマンに当たり、吹き飛ばした。

そしてシンクロが解除された。

「シンクロが終わつた…」

「まだだ熱斗!僕達は帰るんだ!」

「ああ、そうだった!」

二人は立ち上がり、ダーク・ネビュラ・シャドウの所へ走った。

つづく

## 自爆プログラム

一人のロックマンはすでに疲労状態で倒れそうだった。

「熱斗…僕に考えがある…」

「なんだ?」

熱斗が聞いた。

するとスバルは熱斗の方を向き、言った。

「さよなら熱斗…ミソラにも言つといて!」

「なつ、何言つて…うつー」

スバルは熱斗を蹴り飛ばし、熱斗は外へ吹っ飛んだ。

そしてスバルはあるプログラムを起動させた。

「ジバクプログラムサドウシマシタ、アトジュウビヨウデバクハツ

シマス。」

そしてロックマンはダーク・ネビュラ・シャドウの脇に立がみついた。

ドオオオオオオオオン！――！――！――！

基地が吹っ飛ぶほど威力は凄かつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1565p/>

---

流星のロックマン4-絆-

2011年3月6日15時10分発行